

家 岸 遺 跡

農村総合整備モデル事業農道65号線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

— 古 窯 址 調 査 —

1 9 9 8

長野県上水内郡牟礼村教育委員会

家岸遺跡 正誤表

頁	4	6	6
行	第 2 図	2 4	2 5
誤	平井富世家	小山文夫氏	学芸委員
正	平井富善家	小山文夫氏	学 芸 員

家 岸 遺 跡

農村総合整備モデル事業農道65号線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

— 古 窯 址 調 査 —

1 9 9 8

長野県上水内郡牟礼村教育委員会



家岸窯址（1号窯）

序

農道改良工事整備事業にともない、本村平出地籍にある「家岸（やぎし）遺跡」の発掘を実施することになりました。埋蔵されている文化財の破損を防止するため、記録・保存を緊急に行う必要に迫られて参りました。家岸地区は平出地籍北側の高台で南斜面となっており、以前より土器の破片が数多く見つかっていました。今回の発掘調査は20日ほどの短期間に集中して行われましたが、窯址1基が見つかり、須恵器（平安時代の土器）が多数出土しました。この地籍は土器に適した良質の土があり、近くに遺跡が多く散在しています。古くからの住民の生活が記録されています。これらのことも含めて、点が線になり、面として古代の生活や文化の解明がなされることを期待致しております。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会をはじめ各関係機関、地元地権者の皆様、調査協力員各位に深く感謝を申し上げます。

この報告書を含め村内の資料が、むれ歴史ふれあい館に展示され多くの方々に活用され、お役に立つことを願っております。

平成10年3月

牟礼村教育委員会
教育長 山田 邦彦

例 言

- 1 本書は、農村総合整備モデル事業としての農道65号線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査は牟礼村教育委員会が牟礼村役場産業振興課の委託を受け実施した。
- 2 発掘調査の記録、得られた資料、出土した遺物は牟礼村教育委員会が保管している。
- 3 家岸遺跡の略記号を「HY」とする。
- 4 遺物の整理、拓本、および図面整理、トレースは富岡鹿子、柳沢まち子が行い、遺物の実測は横山かよ子が行った。
- 5 本書の執筆・編集は主として横山かよ子が行ったが、第2章は矢野恒雄が、第3章第3節は小柳義男が執筆した。
- 6 遺構の測量は(株)写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより1：20の縮尺で基本図を作成し、本書では1：40にしてある。
- 7 遺物実測図、土器拓影の縮尺は基本的に1：3にしてあり、異なるものもあるが各々縮尺を示してある。
- 8 遺物実測図、遺物観察表、写真図版の番号は一致する。
- 9 本調査にあたり、笹沢浩・小柳義男・平井太一・平井隆二の各氏にご指導とご協力をいただいた。心から感謝申し上げます。

目 次

口 絵
序
例 言
目 次

第1章 調査経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の体制	1
第2章 家岸遺跡の地理的歴史的環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調 査	9
第1節 調査の概要	9
第2節 遺構と遺物	10
第3節 底部に爪形圧痕をもつ須恵器	17

写真図版

抄録

挿 図 目 次

第1図 旧山神代小字図	2
第2図 旧山神代地区図	4
第3図 家岸遺跡遺構全体図	9
第4図 家岸遺跡地形図	11
第5図 家岸遺跡周辺の古窯址分布図	12
第6図 1号窯実測図	13
第7図 S K 1 実測図	16
第8～12図 1号窯出土遺物実測図	23～27
第13図 S K 1 出土遺物実測図	27
第14～15図 タタキ目と当て具拓影図	28～29

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過

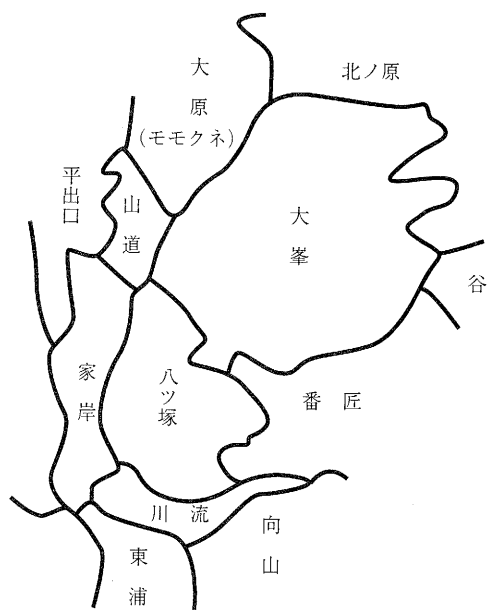
平成9年度に農村総合整備モデル事業農道65号建設工事を実施することになった。工事予定地周辺には須恵器生産の窯址が多く分布していること、また土地所有者のひとりでもある平井太一氏から以前より教育委員会へ遺跡かどうかの照会があった場所が工事範囲に当たることから、確認の必要があり、事業の担当課である産業振興課と協議をおこなった。平成8年12月、工事予定地の試掘調査を行い、窯跡を確認した。産業振興課との再度の保護協議を経て、平成9年6月25日～7月18日までの本調査実施に至った。

第2節 調査の体制

調査主体者	牟礼村教育委員会	教育長	山田 邦彦				
事務局	総務教育課	課長	金井元司				
	〃		栄部史子				
調査担当者	〃		横山かよ子				
調査協力者	伊藤利男	神谷浦太郎	久保田哲子	高野芳美	高野きくよ	寺島尊夫	
	外谷ふみ子	富岡鹿子	中沢絢子	二本松久美子	柳沢まち子		

第2章 家岸遺跡の地理的歴史的環境

第1節 地理的環境



第1図 旧山神代小字図

平出北部の旧山神代（現平出北部の内）集落は主として大字平出北端旧北国街道の東側と、北国街道から分岐する番匠集落への道沿いとの間に立地する地域である。大正12年（1923）5月5日、青野神社（南部）大穴牟遲神社（平出本村）山神代神社の3社が合併して平出神社になる前、山神代神社（犬石神社）を氏神とする自然村であった。地形的には北は字大峯等の山地を背にし南方に開け、字川流地区で東流する月見川に臨む傾斜地で、眼下に平出地区の大半を見下ろし髻山から善光寺平まで遠望できる景勝の地である。

気象的には集落の北側に近い分水嶺の三本松峠を境にし、牟礼盆地より冬は積雪が少なく、また北風のあたらない住みよい地区である。交通上は南方から三本松峠を越える坂本的な要所で、旧北国街道端には昔から「与治右衛門坂」と呼ばれる急坂がある。その他この街道にやや平行して東側に字平

出口、字山道などの古い交通地名が存在する。

集落は南端の低地、字家岸・川流の水に恵まれた月見川附近に大部分立地し、現在は29軒の純農村である。屋敷に続く水田の外は全部果樹園で、いわゆる畑作農業中心のオカドコである。

第2節 歴史的環境

1. 沿革

通称山神代は元禄3年（1690）中尾村（元和2年神代村から独立）の新田があったのが正式に中尾新田村として独立。さらに文久2年（1862）に山神代村と改名し明治に至ったものである（『豊野町年表』）。以下これらの経緯を僅かな史料により述べる。

正徳5年（1715）の「中尾新田割山銘細帳中尾村」（豊野郷土資料館蔵写真）には次のように書かれている。

覚

四万式千百九拾四歩 中尾新田江割渡候分

此訊

壹万七千九百坪 面わり分本途

残る式万四千式百 此内へ高わり分壹人二付

九拾四歩 七百五十坪ツ、外三百歩

此分式道高わり 入候面惣面わりメ壹人ニ

二成申候 付千五十坪ツ、

丸山壱ツ 是ハ中山

七右衛門方江参り 与 兵 衛

市 左 衛 門

伝 兵 衛

三 郎 衛

嘉 平 次

加 右 衛 門

作之助方へ参り 吉 三 郎

金五右衛門

権 四 郎

斧右衛門持
次郎右衛門方へ参り 杢 右 衛 門

長左衛門持 左 太 夫

治右衛門跡

中俣江参り
是より前山分 左之右衛門先

仁 兵 衛

金 右 衛 門

左 五 兵 衛

高山殿参り 弥 五 兵 衛

高山殿参り 弥 助

方へ参り 市 兵 衛

重兵衛方へ参り 二 郎 助

面わり壱人分 文 左 衛 門
甚 右 衛 門
清 八

此分之山他領他村江参るか又は売引には為致不申定に御座候。若外江引越申候ハ、組中江右之山返し可申候
己上

面わり人数女壱人

(以下略)

元禄3年独立して25年を経た正徳5年になっても中尾新田割山と中尾村が唱えているのは、中尾新田村発
足以前からの割山であったことを明確にしたものであり、この地はもともと中尾村の入会山であった名残り
とみられ、それが逐次そこに定住する人が増え、飛び地の新田村へと発展したものと推考されるのである。

「面わり人数二十一人分」とあるは、21軒の戸数を示すものとみられる。

天保14年(1843)卯八月百姓代斧松組頭直作、名主六右衛門が中野御役所の森親之助に差し上げた書類(平
井隆二家蔵)には、中尾新田村の総石高(延宝6年の検地帳を以取調)が次のように書かれている。

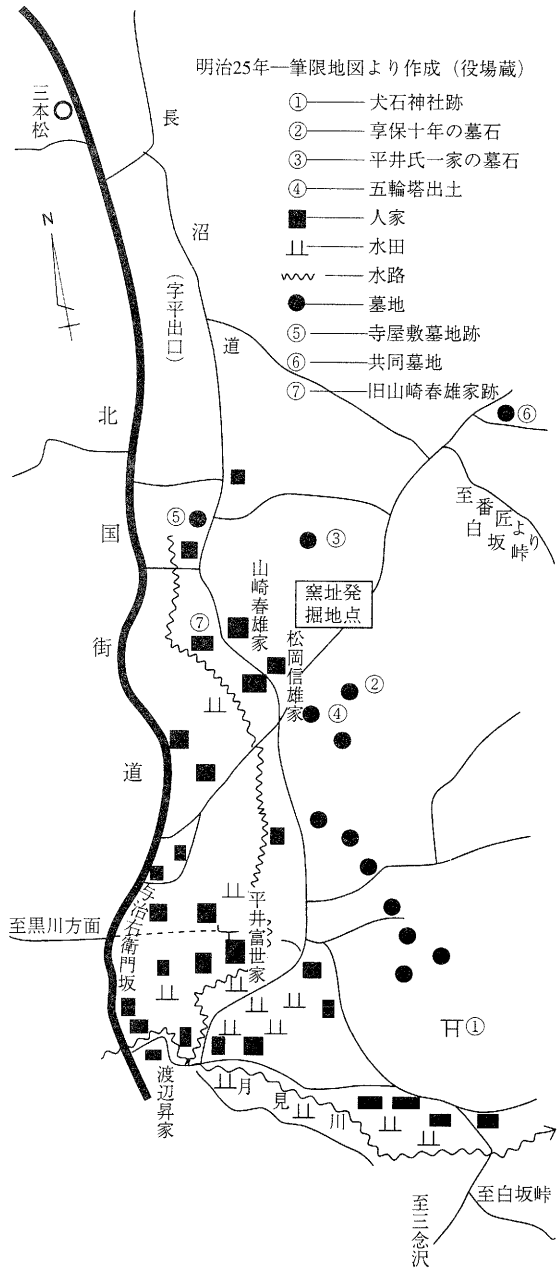
一、高百拾三石三斗

此反別拾四町七反五畝拾六歩

此取米 拾貳石四升八合

此訳

田高七石六斗壱升五合



第2図 旧山神代地区図

此反別六反八畝拾八歩

此取米三石壺升五合

田本免 免三ツ九分五厘九毛余

中下下、メ反米四斗四升壺升六夕

畑高百五石六斗八升五合

此反別拾四町六畝貳拾歩

此取米九石三升七合

畑本免 免八分五厘五毛

上中下下、メ反米六升四合三夕

上の総収穫高百拾三石三升に対する田高の割は7分、畑高は9割3分となる。まさにこの地は完全なオカドコである。また同書類の末尾に「天保十三寅年家数拾九軒、人数七拾五人内男三拾六人女三拾九人」とあるのをみても、農業立村として生活の厳しさがうかがわれる。

文久2年(1862)中尾新田村は中尾村に「山神代村」と村名を改称したいと申し出たので、同年10月6日中尾村は中野代官所宛次のような文書(豊野町中尾武郎家蔵)を提出した(読み下し文にする)。

恐れ乍ら書付を以て申上げ奉り候

一、当御支配所水内郡中尾新田の儀、村名替願上げ候に付、先般故障有無御尋ね御座候に付、迷惑筋ひと通り申上げ奉り候処、猶今般召出され御理解下し置かれ、これに依て得と勘考仕り候義、別郷に相成り候ても中尾新田にて罷在り候故、本・新の所縁失わざる義に御座候。然るを山神代村と唱い候ては絶縁に罷り成り、神代村の新田の郷様に落入り実々都合筋に御座候間、御賢慮を以て本新の所縁失わざる

御取計い恐れ乍ら願上げ奉り候。右新田の者ども強て御願い申上げ奉り候儀に候は、扨なき次第にて御座候間、私共も出府仕り御伺い申上ぐべきと存じ奉り候。何卒此段聞召しなざる訳、右新田の者共へ御理解成し下し置かれ名聞の村名替等致さざる様、仰せ聞かされ下し置かれ度く恐れ乍ら願上げ奉り候。以上

(幸教)
真田信濃守様御預所
文久貳年戌十月六日

水内郡中尾村 五郎右衛門◎
作 内◎

中野
御役所

かくして山神代村と改称されたのである。その後明治8年(1875)に至り、平出村(本村)と平出新田村と共に3か村合併して平出村となった。明治22年の町村合併で牟礼村の発足(翌年中郷村)により、当地区

は大字平出となったのである。

2. 交通

慶長16年(1611)北国街道開通以前の交通文書が、牟礼神社に蔵されている。その第1は天正11年(1583)上杉景勝から出された制札である。

制札

右信州越国往復之人民経横道之事堅令停止早、所詮自牟礼香白坂を直に長沼へ可令往還之由、仰出被成御朱印者也、仍如件

天正十一年

(上杉景勝)

朱印 三月日 春行中

上の中で重要なことは「牟礼より香白坂^{じき}を直に長沼へ往還せしむべきの由」の文言である。ここで言う牟礼は牟礼宿発足以前であるから、現在の牟礼の町でなく矢筒城下の表町であろう。従来は牟礼から香白坂(神代坂)への往還と言うだけで、その中間はどこを通過したかは余り考証されなかった。ところが今回前述の正徳5年の「中尾新田割山銘細帳」を解読する中で、その末尾に「書上山、千七百八拾坪長沼道そへは八名主山二組中相続之上仕置申候」の文言を発見した。「長沼道そへ」こそ前述の天正11年上杉景勝文書の中で「自牟礼香白坂を直に長沼へ」とある長沼への道筋をさしているのであり、この地域内を通過していることがわかった。

明治25年(1892)の役場の切図を組み合わせて、山神代地区の集落を中心に作成したのが図2である。これによると北の方字平出口より北国街道にはほぼ平行して当集落から月見川を渡って三念沢を目指し、三念沢を下る手前で東に曲がり一里塚に達して、香白坂(神代坂)を下る長沼道がある。

慶長7年(1602)と8年の牟礼神社蔵の交通文書では「信州越国往復之商人荷、従牟礼白坂を直長沼…」となっており、香白坂にかわって白坂が登場する。白坂とは通称は十文字と呼ばれる場所で、番匠集落の南方豊野町との境界である分水嶺的な地形の地である。ここを通過するには前述したように月見川を渡って直ちに東南に分岐すると、いわゆる白坂の峠に達し善光寺平が一望に見える。道は急坂となって下ると神代坂道に連絡する古道筋がある。山神代の古老はこのルート^を長沼道と従来個人的に呼んでいるが、これこそ北国街道開通以前、牟礼盆地から長沼への古道と考えられるのである。

3. 犬石神社跡

字八ッ塚の山頂に当地区の氏神社跡がある。明治4年(1871)長沼内町守田神社の佐藤神主・藤原秀美が中野県庁に届けた文書には次のように記載されている(『神社明細帳原本』明治4年社寺掛〔長野県歴史館蔵〕)。

信濃国水内郡山神代村鎮座

一、犬石大明神

一、本殿 東西九尺 南北式間

一、拝殿 東西四間 南北三間

一、鳥居 地ノ間八尺 長サ壹丈

一、祭神 おこなもちのみこと
大己貴 命

一、神位 無御座候

一、祭日 九月土用五日前

- 一、社地 東西拾間 南北拾五間但御高辻之内
- 一、社領 無御座
- 一、造営之儀ハ産子ニテ仕候式歳之儀ハ不相定
- 一、犬石大明神社ヨリ中野県御庁船渡迄三里半
- 一、右犬石大明神ハ兼勤奉仕罷在候

長沼内町守田神社住居

明治四未歳二月 佐藤神主[㊦]

中野県御庁 藤原秀美 花押

このように明治4年までは犬石大明神と称したのである。ところが明治14年長野県令榑崎寛直への届書によれば、「祭神は大穴牟遲神^{おおあなむちのかみ}と書かれ社号は、明治十二年十一月山神代神社と改称許可になった」と書かれている。大己貴命も大穴牟遲神も同一神で大国主命のことで出雲神社の系統である。犬石はあまりにも土俗的で品位がないと考え村名にちなんで山神代神社としたのであろう。

大正2年(1913)大字平出内の神社合併により、山神代神社は平出神社に合併し、跡地は個人に払い下げられた。昭和15年神社跡に建立された自然石の石標には正面に「舊社地」、側面に「紀元二千六百歳建之」と刻されている。右石標の東側に接して昭和23年(1948)平井悟一・平井佳則・山崎崑助・平井久蔵の4人が発起人となり、集落内から合計1206円の寄付金を集めて独立した立派な流造型石祠が安置されている。これは大正15年平出神社に合併してからちょうど50年になるのを記念したものであろう。このことは地域の人たちが八ッ塚に鎮座した犬石大明神の地を聖地として、昔からいかに大切に護持してきたかがうかがわれる。

4. 門徒宗の人々

平井富善家の墓地(図2の③)にある古い墓石(高さ約50cm)の正面に「法名平井氏一家」、側面に「享保〇年八月」の文字がかすかに読み取れる。法名は門徒宗で使う文字で、「平井氏一家」は門徒である平井氏一族の墓の意である。場所は平井家一族の宅地の裏に続く傾斜地(字屋峯)で、生前の我が家を見下ろせる理想的な墓地である。同家の伝承では「昔、平出願生寺が応仁二年(1468)栃木県芳賀郡平出村から髻山の麓に移住して来た時に、一緒について来てこの石塔を持って来た」とのこと。小山文夫氏(むれ歴史ふれあい館学芸委員)からこのことについて「現存するのは時代が下がるので、後になって当初の意を称して作ったものであろう」との教示を得た。

昔、平井富善家から^{えんきよええもち}隠居家持に出る時家宝の仏壇を持って出たと言われる通称与治右衛門家(現当主平井稔)がある。現在お仏壇の本尊として「紙本著色方便法身尊形」(『牟礼村誌上』参照)その御裏書に「本願寺釋一如(花押)方便法身尊形 願主釋静雲」の墨書がある。一如は東本願寺16代(1619—1700)であるので、元禄年間のもものと推定される。その2は紙本伝親鸞筆九字名号で「南无^(無) 不可思議光如来」としたためられた小幅がある。以上、平井氏一家は現在も平出願生寺系の、髻山證念寺の有力な檀家である。

字川流の旧北国街道端に居住の渡辺昇家に最古の法名として次のように紙に墨書された古い法名が秘蔵されている。

宝永四年丁亥 法名 釋 教念 八月廿五日
元禄七申戌年 法名 釋尼妙順 四月十五日 西巖寺空慶（花押） 扨

上の法名で見ると、同家は長野市長沼の浄土真宗成田山西巖寺の檀家である。また次のような法名もある。

釋尼妙春 享保十年
 平出先祖 亥正月十二日
 釋善 了 正徳五年
 未十月六日

平出先祖とあるので正徳5年（1715）没の善了、享保10年（1725）没の妙春2人は夫婦で、正徳5年には平出に住んでいたのである。しかし前記のように元禄7年には西巖寺檀家であったのである。現在は高山寺檀家で何時の時代から転寺したかは不明である。同家の伝承では長沼から移住して来たこととある。檀家関係からしてもさもありなんとと思われる。現宅地は大字平出字東浦に接し突き出ているので「でばりの家」と呼ばれている。

山崎春雄家の墓地（図2②）に「代々之墓享保十年十二月」と明瞭に読み取れる門徒型の墓塔（高さ約50cm）がある。享保10年と正確に読み取れるのは貴重なものである。同家の過去帳に大祖先の法名として「釋妙心 享保十年十二月二十五日」があり、享保10年の墓塔と全く一致する。現在同家は前者の渡辺家と共に高山寺の檀家で、名のある世話人である。

同じ山崎系統の仁太夫（現山崎貞雄家）は文政元年（1818）に高山寺境内に、同13年には名号堂入口に石造常夜燈（『牟礼村の石造文化財』参照）を寄進している。仁太夫の本業は伯樂^{はくろく}で牛馬の売買を手広くやったが、1面信仰心が厚かったのである。

松岡信雄（9代）家、初代の方は加平治と称し、法名は「釋浄玄 享保十巳年六月八日」とある（過去帳による）。没年の享保10年は、すぐ隣家の山崎春雄家の墓塔と全く同年である。

同家の故松岡倉蔵（大正2年1月1日生）は生前「松岡家は近所の山崎・宮沢家（現在小玉に移住の宮沢達男）と共に、モモクネに近い字山道に住んでいたのが、今の場所に下りて来た」と語られた。このことは現当主には伝承されていないが、西隣に居住の山崎ち江子氏（大正9年3月20日生）は、「以前倉蔵さんから聞いたことがある」と証言されている。『長野県町村誌』の平出村の項に偶然にも「山神代村、古昔字山道に一部落をなし居住す。後年月不詳通路の便を以て今の地に移住す」とある。失礼な言い方であるが倉蔵氏は、町村誌を読んで話したのではなく同家の先祖代々の伝承であったと推察するものである。字山道に居住した時代の宗派は不明である。

天保14年（1843）中尾新田村の「浄土真宗宗門人別御改帳（平井隆二家蔵）によると寺院別の家数は、證念寺が6、高山寺が10、長命寺が2、正法寺が1の檀家である。地元の高山寺檀家が一番多くいずれも門徒である。

5. 寺屋敷の古墓塔

山崎寿家の裏、大字豊野字平出口453番地を、通称地域の人達は寺屋敷と呼んでいる。同家はこの土地3畝13歩の原野を昭和26年渡辺芳衛家から入手したが、それ以前からこの地の一角に古い墓塔が建っていたとのこと（図2⑤）。入手後その墓塔を字山道にある共同墓地の、自家の墓地に移転した（図2⑥）。

現在「享保十五歳十一月廿四日 本誓□信女」（高さ56cm）と「享保□□十月十八日 妙道禪定尼」（高さ50cm）と解読できる墓塔2基と、小さな石仏2基ほどある。また、そのすぐ隣の平井太一家の墓地にも年代不明であるが、やはり寺屋敷から移転された山崎寿家と同型の墓塔2基の中、禪定門の文字のついたのが1基ある。これらは何れも禪宗系の戒名のついた墓塔である。従って最初にあった寺屋敷の地は禪寺跡と推考されるものである。とすると享保の頃には寺屋敷の地続きには禪宗系の人家があったことは間違いない。しかし当今これを実証する手がかりは皆目ない。

6. まとめ

従来、山神代地区については明治8年新しく平出村に合併した小集落であるので、集落史の調査研究が不十分であった。今回幸いに豊野地区からも史料入手ができ、牟礼村内でもその成立が珍しい集落であることがわかった（『牟礼村誌上』参照）。

第1は中尾村の割山の地が逐次開発されて中尾村の飛び地的な新田村が北国街道開通以前の長沼道添えに成立したものである。時に元禄3年であった。

第2は土着の住民の構成である。上杉・武田の川中島の戦いで、平出願生寺門徒が山神代にも逃れて来た。また長沼西巖寺門徒も長沼方面から移住して来た。この願生寺・西巖寺は有名な磯部6か寺に属する寺院である。一方、北のモモクネ方面から下りて来たとの伝承を持つ人たち等である。モモクネは「かきね」の意で、旧家所在の中世的な地名である（『信濃国地字略考』栗岩英治著）これは聞き捨てならぬ伝承である。

第3はこの地に土着した大祖先の墓塔はおよそ享保10年前後である。これは元禄3年中尾村から中尾新田村として独立した時代と、偶然に一致する。ところが寺屋敷にあった禪宗系の墓塔については、臨地の住民は無関係であると異口同音に証言している。甚だ理解に苦しむところである。しかし忘れられてしまったのであろう。

最後に宮沢達男家の墓地（図2の④）改修で出土した五輪塔。そして故松岡倉蔵氏が字山道に所有していた畑で採掘した五輪塔（現在高山寺と小林好氏の墓地にあり）などは、門徒宗の人たちが移住して来る以前、この地域に居住した中世人の名残りとして、みられることを付加しておく。



寺屋敷の旧地に立つ山崎寿氏

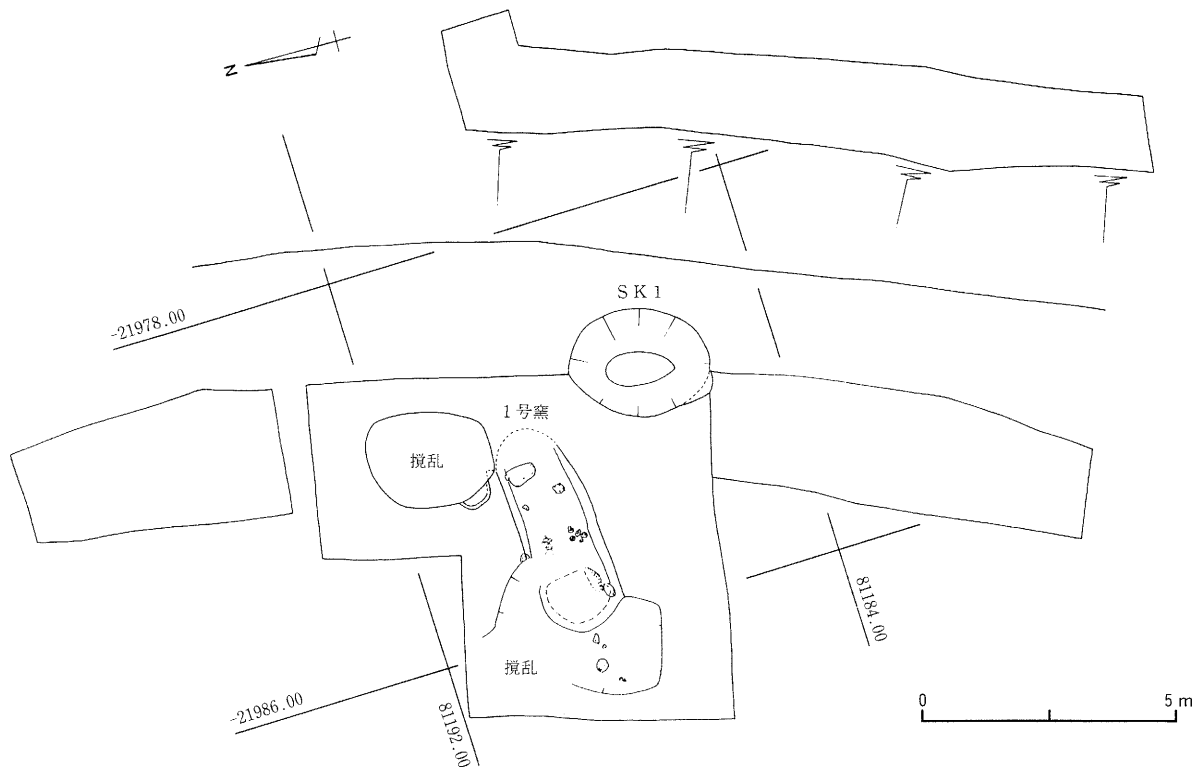
第3章 調査

第1節 調査の概要

家岸遺跡は牟礼村大字平出字家岸629に所在する。平出地区の北端で、南急斜面のなかほど、標高600mの位置にあたる。

調査で検出された遺構は黄白色粘土層を掘り込んだ平安時代の登り窯が1基、土坑が1基である。出土した遺物は須恵器の坏、高台付き坏、蓋、甕片、壺片、四耳壺片である。時期は高台付き坏に深いものと浅いものが混在していること、蓋のつまみに古い形が残っていること、甕に青海波文が多いことなどを考え合わせ、9世紀初頭に位置づけておきたい。

最近の登り窯の調査では、1991年に家岸遺跡の南西の方向上の山遺跡で2基が発見されている。また、西側の前高山の周囲では6基が分布していて1972年に調査されている。東側には番匠北窯址が存在している。このように遺跡周辺には古窯址が4か所で発見されている。今回の調査での検出は、平出地区がかつて平安時代において一大窯業地帯であったことを再認識させるものであった。現在、村では遺跡の詳細分布調査が進行中であるが、この周辺では新たに窯址が発見される可能性が大きいと思われる。作業期間の長さ、今回は検出できなかった窯業に関連した施設、携わった人々の住居などすこしずつ明らかになっていくことを期待したい。



第3図 家岸遺跡遺構全体図

第2節 遺構と遺物

1. 窯 址 (1号窯)

窯体は丘陵の南斜面に築かれ、主軸方向はN-86.5°-Eでほぼ東を向き、等高線に対しては14°振れて斜めに構築されている。

煙道部分は現道により破壊されている。現存していたのは前庭部から焼成部の途中までで長さ6m、焼成部の床幅は110cmである。前庭部には灰状の炭化物が3cmほど堆積していた。焚口には炭化した燃料材と、構築材として積まれていたと思われる石が残っていた。燃料の木材については残念ながら樹種同定は行っていない。

燃焼部の傾斜角は33°、焼成部との変換点の傾斜角は16°とゆるやかになり、また60cmほど奥へ入った所で33°と傾斜がきつくなっている。燃焼部と焼成部の境付近は非常によく焼けていて青灰色になってガチガチと堅くしまっている。その下層は赤い軟らかい焼土である(第6図C-D)。焼成部E-F付近の床面は青く焼けてはいない。赤く砂礫状にさらさらしている。側壁はよく焼けガラス状になっており、残りも良く、分かりやすかった。スサ入りの粘土で造られ側壁には指でナデつけたと思われる跡がはっきりと観察できる。天井部は崩落して残っていない。焼成部の奥の床面には焼けて赤く変色した大きな石(長さ30cm)があった。その場所の側壁は赤く焼けており、急に傾斜角がきつくなっていることから、この辺りから煙り出し部分であり、奥壁にあたり、この石が奥壁部に詰められていたのかもしれない。

出土遺物

蓋 (第9図10~19)

10個体が図化できた。そのほか出土した破片の重量は1,200gである。完型に近い1個体の重量は180~260gである。

10は96年の試掘で出土。口径11cm、器高3.5cmと小型である。天井部は半円型にまるく、外面は1/2が回転ヘラ削りされている。器肉は薄く丁寧に整えられている。そのせいか胎土に含まれる小石が表面に目立つ。つまみは擬宝珠型が付く。

11・12・13は口径が13cmから14cmと比較的小型である。天井部1/2が回転ヘラ削りで整形されているのは11と13で、12は1/3ぐらいである。11は口縁と天井部の境が強いナデのせいか沈みこんでいるような形になっている。他と比べて胎土は粗くざらざらしている。13の器高は2.8cmと低い。またつまみの接合部に糸切り痕が見える。14~19の口径は16cm台、器高は3cm台である。14の天井中央部分の器肉は厚い。また回転ヘラ削りの速度の変化によりついてしまったと考えられる工具痕が残る。15の天井部は丸い。

図化できた10点のうち、歪みのあるものは12、亀裂のあるものは18であり、みんな比較的良好品である。

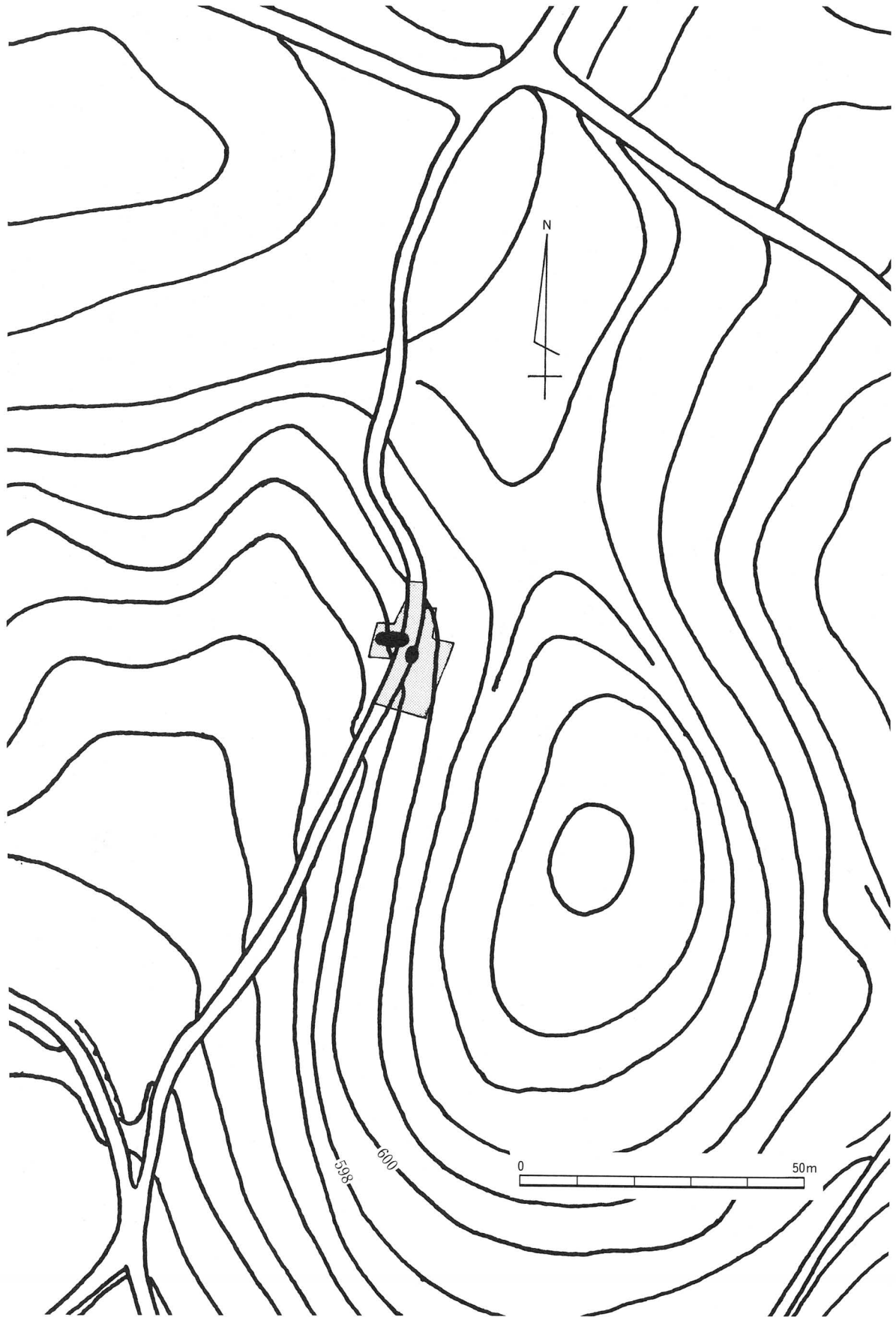
つまみについては、ほとんどが中央部分に微かな突起を持つ擬宝珠型であるが、平らなのが12、くぼんでいるのが15である。色調については、赤色がほとんどなのに対し、灰色は15と19である。

全体の出土量からして蓋は少ない。

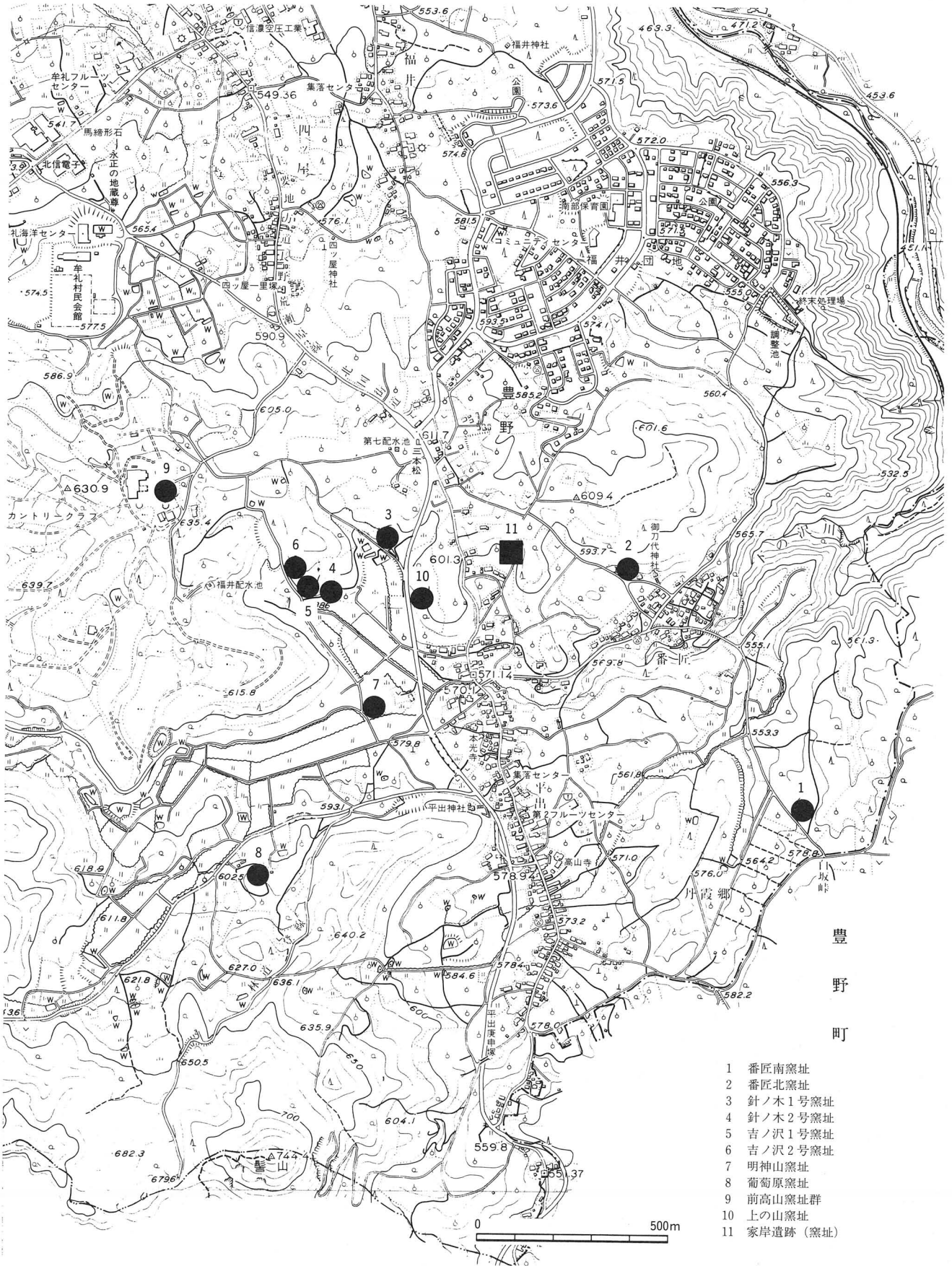
坏 (第9・10図20~56)

坏は図示できたものは37個体である。歪みが大きかったり、他のものと癒着していたりで図示しなかったものと小破片の重量の合計は6,040gあった。図示した完型個体13点の重量は150~155gが7点、160~167gが5点、175gが1点、平均重量は157gであった。

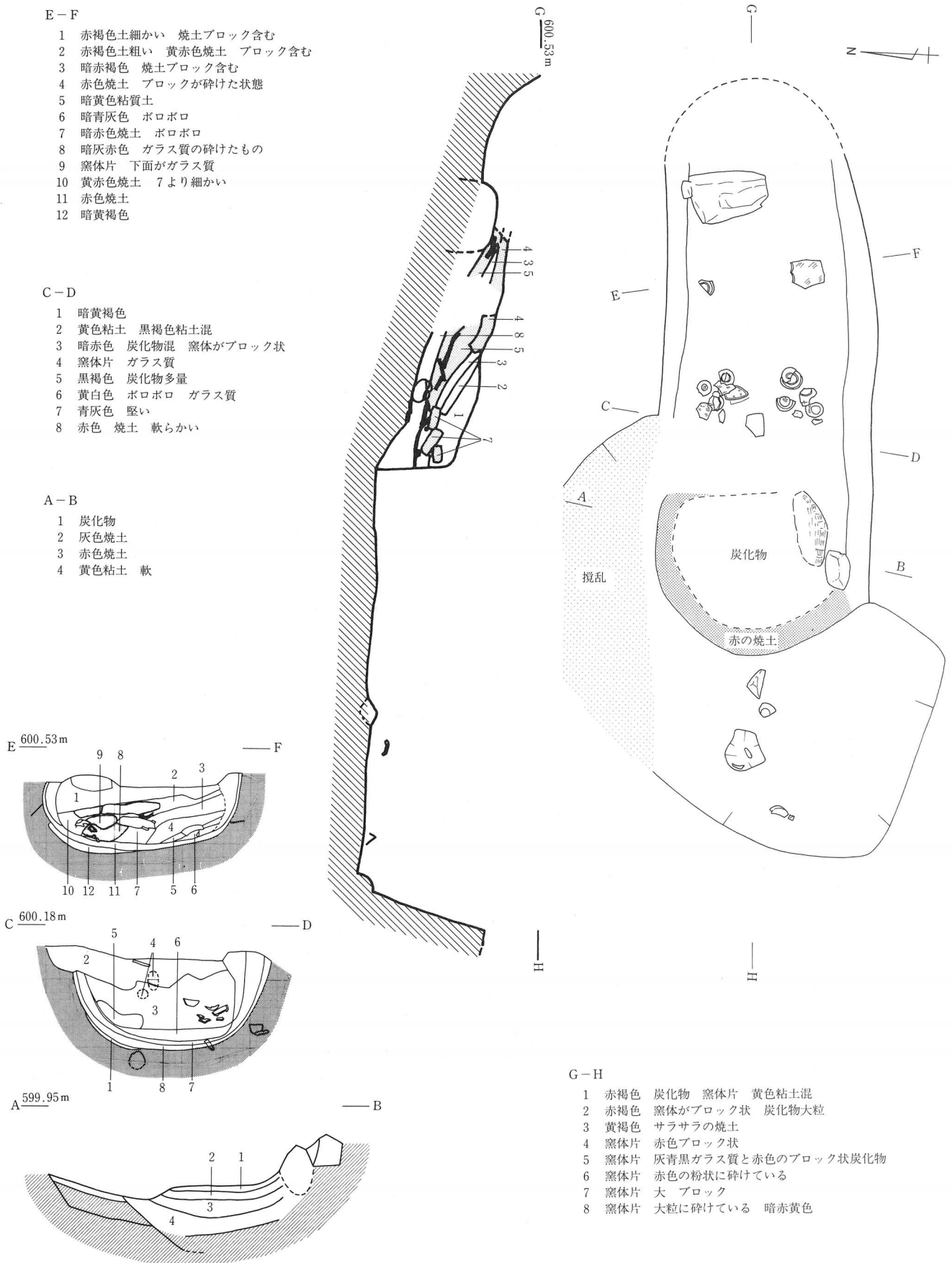
法量を見ていくと口径は最も小さいもので11.4cm(47)、最も大きいもので13.9cm(52)、あとは12cm台で



第4図 家岸遺跡地形図



第5図 家岸遺跡周辺の古窯址分布図



第6図 1号窯実測図 (1/40)

ある。その突出している47、52は歪みが大きいことを考慮にいと、ほぼ口径は一定といえる。

口径は5.5～6.7cmの範囲に入るが、特に小さいものは4.9cm (53)、大きいものは7cm (41) となっている。器高は浅いものは3.1cm (34) から深いものは4.4 (46) まで平均に広がっている。

このように実際に目で見ても特別に大きさが違って見えるものはなく、数字的にも規格化している。

器形を観察する。

体部は立ち上がり部分から口縁部まで一気に外反しているものが多い中で、膨らみを持ち内湾ぎみのもの(20・21・32・33・35・37・44・46・49・50・51・55)。

口縁端部が強くナデられて内面にロクロ痕が目立ち、端部は鋭く整えられている(23・51)。22の口縁端部もとがっている。24の体部立ち上がり部分は押さえが足りなかったらしく底部との境が明瞭でない。50は前庭部からの出土で、焼きが甘く軟質須恵器のようである。

底部はすべて糸切りである。色調は床面出土の36・37のみ灰色で、ほかは赤色系である。底部に焼け歪みが多い。器面に気泡が膨らんだようなブツブツが多く出ている。

高台付き坏 (第11・12図57～74)

出土した破片の重量は2,500gである。完型に近い1個体の重量は200～300gである。

図示できた高台付き坏はおおよそ以下の3形態に分類できる。

① 口径・底径・器高それぞれが小さく小型のもの (57～60)

口径は10cm前後、器高は6～7cmである。いずれも歪みは少ない。57と59は底部に整形時に付いたと考えられる爪形圧痕がみられる。また気泡の膨らんだ部分がある。暗茶褐色のものが57と59で、58と60が灰色である。58の底部には糸切り痕が残り、付け高台であるが、中央よりずれて付けられている。機械的作業を思わせる。60は口縁部のみの残存であり、ほかのものより幾分大きめであり器肉は薄い。

② 器高の大きな(深い)もの (第11図61・62)

つぶれていたり、歪みがひどかったり図示できなかったが、窯体床面から灰をかぶった土器が多く出土した。歪みが大きくはあるが2点のみ図示した。底部いっばいに大きめの高台が付けられ、体部はすぐ立ち上がって外側に開いている。いずれも灰をかぶりまた歪みが大きく良い仕上がりとはいえない。

③ 口径と底径が大きく、器高の小さい(浅い)もの (第11・12図63～74)

器高は4cm前後と一様である。口径は、個体が歪んでいることや、欠損部分が多いことなどを考慮に入れても14.5cm前後のものが多い。大きいものは16cm前後ある。そんな中で69は口径が9cmと特に小さい。

器形を観察すると体部が内湾するのが63・66・73である。63・66は底部から稜をつくって立ち上がり口縁端部を内湾させている。66は大きめの高台が付けられ、体部の立ち上がり部分は角張っており、口縁端部を内湾させている。

底部が厚く、重いと感じさせるのが64・67・72である。それぞれ丁寧な作りであるが、特に64は良品である。

口径が大きい68・71・74はひどく歪んでいる。体部は外側に開いている。

ほかと異なる様相をもつのが74で、体部の器肉は薄く、意識的につけたと考えられるロクロ痕が明瞭である。また高台も他が外側へ開いているのに対し、垂直ぎみである。

底部の整形については、中央部分に糸切り痕を残すものがほとんどである。回転ヘラ削りによるものは68・74である。

特筆すべきは、底部に爪痕と思われる痕跡がある土器(63・64・67・71・72・73)が出土していることで

あり、後述する。

色調については赤色が多く、灰色のものは65・66・69・70の4点である。

凸帯付四耳壺（第8図1・3）

1は焼成部床面から出土しており灰黄色の灰がこびりついている。1/5の破片である。最大径は胴部上部にあり28.2cmを計る。凸帯の断面はくぼみを持ちほぼ台形である。ほかに別の2個体の破片が出土している。これについてはタタキ目と当て具痕の拓影を示してある（第14図）。3は灰黒色である。頸部の径14cm。黒褐色。内面に灰黄色の灰がこびりついている。器肉は薄い。内面には同心円の当て具痕が見える（第14図の1と同一個体か）。

短頸壺（第8図2）

肩部のみの破片である。胴部最大径は14.8と推定される。外面は灰黄色の灰がこびりついていてわからないが内面は丁寧にナデ調整がなされている。検出面の出土である。

甕（第8図5～9）

5、6は小破片で断面のみ示した。凸部分が強調されている。7は口径40.6cm、8は口径50cm、9は口径57.2cmを計る。いずれも実測できる範囲の小破片である。7と9は床面近くの下層から出土しており灰黄色の灰がこびりついている。手描きの1条の波状文が施されている。8は上層の現代の物も混入された層から出土している。7、9はこげ茶色、8は灰色である。7の口縁部には2本の沈線を巡らしてある。

ほかの図示できなかった破片は20,390gあった。平底の底部も出土している。

2.1号土坑（SK1）

現農道築造時に削平されたらしく上層では1/2のみの検出であった。窯址の上方であり、南東の1mのところに当たる。長径2.7m、短径2.1m、深さ80cmの円形を呈する。覆土は5層に分けられるが全体に焼土が含まれている。

出土遺物（第13図）

図示できたものは、灰・蓋・高台付き坏・壺の6点である。細片で図示できないものには、土師質のような軟質須恵器坏（西浦遺跡で出土したような土器）、甕片、窯壁片などがある。

蓋（75）

口径16.8cm、器高2.9cm。天井部の1/3がへう削りされている。器肉は薄い。つまみの中央部には微かな突起があり灰色を呈する。胎土は窯体内出土のほかのものより粗い。内側には溶滓のようなものが付着している。

坏（78・79）

78は1/3の残存であり、口径13.4cm、底径6.7cm、器高3.8cmである。底部は厚めであり、体部は外へのびやかに開いている。灰色を呈する。79は口径13.6cm、底径6.7cm、器高3.8cmで大きめである。酸化炎焼成の軟質須恵器である。色も明橙色でかわらけのようである。破片も割れるというのではなく剥離しているという状態である。ひどく磨耗している。体部の立ち上がり部分は明瞭な稜線を残し大きく外へ開いている。

高台付き坏（76・77）

76は口径14.5cm、底径9.6cm、器高7.6cmの深い型である。直ぎみの大きい高台が付けられている。高台にはくぼみはなく平で全体で接地している。体部の立ち上がり部分は角張り、外に開きぎみにそのまま一気に口縁端部までのびている。1/4が欠損しているが整った個体である。底部は糸切りの後の調整であるへう状工具のナデ痕が見える。また、爪形圧痕が残っている。

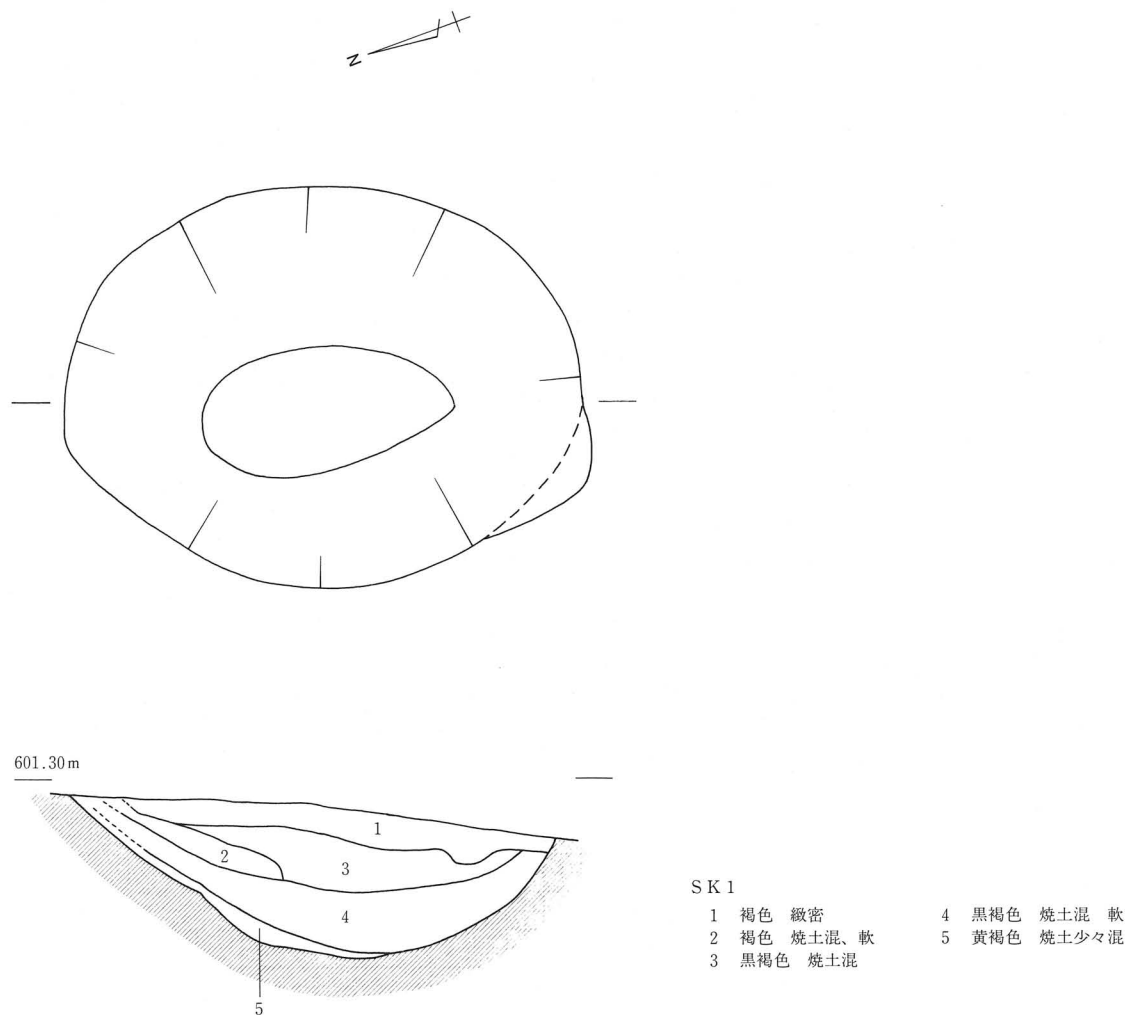
77は底部のみである。底径10.2cm。高台は外へ大きく開き、内側で接地している。76と同様にヘラ状工具によるナデ痕が見え、爪形圧痕が残る。

壺 (80)

底径は8.2cmある。底部から胴部下部までの破片である。外側に自然釉がかかり、溶滓が付着している。

参考文献

- 小柳義男 1992 「平出遺跡群発掘調査報告書」 牟礼村教育委員会
 小柳義男 1997 「牟礼村誌 上 自然 原始 古代 中世 近世」 村誌・学校誌編纂委員会
 笹沢 浩 1976 「上水内郡誌歴史編」 上水内郡誌編集会
 笹沢 浩 1986 「凸帯付四耳壺考」 長野県考古学会誌51
 田辺昭三 1981 「須恵器大成」 角川書店
 長野県史考古資料編 1981 長野県史刊行会
 原 明芳ほか 1989 「吉田川西遺跡」 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 3
 埋蔵文化財発掘調査報告書13 1997 「清水山窯跡・池田端窯跡・牛出古窯遺跡」 (助)長野県埋蔵文化財センター
 前田遺跡 1981 「長野県牟礼村緊急発掘調査報告書」 牟礼村教育委員会



第7図 SK1実測図 (1:40)

第3節 底部に爪形圧痕をもつ須恵器

1. 家岸窯出土の爪形圧痕をもつ須恵器

家岸窯址からは坏、高台坏、蓋、甕等の須恵器が出土している。爪形圧痕がみられるのは高台坏に限られる。

高台坏は口径・器高によって深椀の大・小、椀の大・中・小に分類されており、それぞれの個体のうち爪形圧痕をもつ点数は次のようになる（底部が確認できる資料中の点数）。

深椀大で6点中1点、深椀小で3点全部、椀大で7点中4点、椀中で12点中6点、椀小で5点中1点となる。個体数が少ないのではっきりしたことは言えないが、器種毎の割合は20%前後から50%近くにも及ぶ。また、全体的な傾向としては大きめの器種につく割合が多いようである。

2. 「爪形圧痕」の類例と研究

爪形圧痕がはじめて注目されたのは、兵庫県志方町（現三田市）西ノ池古窯址の報告である⁽¹⁾。報告では坏Bの底部高台内側に残る「爪形状圧痕」を取り上げ、「この圧痕は形状より見て製作時において何らかの形で残されたものと思われ、坏部の約半数についており、蓋Aの一部や高台をもつ壺にも同様の圧痕を持つものがある」と述べている。また、兵庫県内の禰布ヶ森西遺跡、志方町大塚古墳、三田市青野ダムサイト窯址の類例を紹介し、当時は出土が兵庫県下に限定されていたことから「地域的特色のメルクマールともなり得る」のではないかと述べている。

次いで、岐阜県岐阜市老洞古窯跡群の報告⁽²⁾では「有台坏身の高台貼付と関連した技法」として「爪状圧痕」に注目している。そこでは、「断続的に1周するもの、一つ一つが連続的に1周するものなどがあり、様々であるが、前者が圧倒的に多い」、「極めて深く明瞭な形で存在するもの、わずかな痕跡程度に見られるものがある」、「圧痕の順位を見ると、底部を逆にして上から見た場合、それは逆時計方向についていったものであることが知られ、しかもそれは、最終段階についたものであると思われる」と圧痕を観察している⁽³⁾。

そして圧痕のついた時期については、「つまり、高台を貼付する際、底部をヨコナデ調整するが、この爪状圧痕はその後についたものであり、従って高台貼付と関連した技法に付随したものと考えたが、実際は、貼付する時ではなくそれ以後の技法的段階に対応するものである」「ただそれは、高台を底部に貼付する段階のものとは考えられず、最後の調整段階についたものと想定され、全てのものに見られるのではないことを考えると、何か偶然的についたものとも思われる」と述べている。また、兵庫県西ノ池古窯跡群（8世紀前半）、愛知県鳴海32号窯（8世紀後半）、愛知県篠岡4号窯（11世紀前葉）、愛知県広久手F号窯（11世紀中葉）、岐阜県北丘古窯跡群（11世紀）の事例をあげ「かなり普遍的に認められるものであること」としている。

窯跡の年代は、1・2号窯跡で時期差があるが（1号窯跡8世紀第1四半期の後半、2号窯跡8世紀代2四半期）8世紀前半ととらえておく。「爪形状圧痕」がどちらから、どのような割合で出土しているのか報告書からは判断しがたい。

岐阜県恵那市正家1号窯の報告⁽⁴⁾は「爪形状圧痕」を「爪先によって施された考えられる」とし、いろいろなタイプの圧痕を①大きく円形に巡るもの、②中心部に小さく円形に巡るもの、③らせん状に巡るもの、④曲線の端に放射線状に巡るもの、⑤鋸歯状で円形に巡るもの、⑥鋸歯状に二重に巡るものの6タイプに分類した。

そして、⑥の存在や、高台周囲に整然とした円形に巡るものがほとんどみられないことから、「ただ単に高

台貼付け時に（無意識的に）残されたものとは考えられないが、その性格・意味については現段階では不明である」と記述している。

さらに底部整形技法を器種毎に表にまとめているので爪形圧痕の割合もつかむことができる。表から「爪形」圧痕の数を調べると椀で1,643点中55点、深椀で530点中3点、皿で1,133点中191（段皿449点中なし）、折縁皿で65点中4点となる。椀で3.3%、深椀で0.6%、皿では16.9%と器種によって大きな違いが見られる。窯跡の時代については虎溪山1号窯式期（11世紀前半）に位置づけられている。

岐阜県多治見市北丘26号窯の報告⁽⁵⁾は、「高台は、回転篋削り整形直後に粘土紐を環状に貼付し、鞣し皮などをあて、轆轤の回転によって整形した付高台であり、整形の際に中指または薬指の爪先が触れたと思われる爪形圧痕を残す物がある」と記述している。出土遺物の観察表に記録された爪形圧痕の数は、椀Ⅰ（大椀）で79個体中7個体、椀Ⅱ（椀）で73個体中6個体、椀Ⅲ（小椀）で11個体中1個体、皿で77個体中3個体、段皿で87個体中27個体となっている。

やはり器種による差が大きく、椀で約10%、段皿では30%ほどに爪形圧痕が残っていることになる。窯跡の時代については虎溪山1号窯式期（11世紀前半）に位置づけられている。

福井県宮崎村船場窯跡からも多くの爪形圧痕が出土している⁽⁶⁾。その割合は短頸壺が12点のうち1点、坏BⅠが176点のうち29点、坏BⅡが65点のうち9点、皿BⅡが69点のうち10点、皿BⅢが18点のうち1点、椀BⅡが4点のうち2点となっている。坏BⅠ・Ⅱ、皿BⅡで15%前後の爪形圧痕が残っていることになる。窯跡の年代については「8世紀代の様相が残る一方、新しい様式の採用」がみられ9世紀初頃と考えられている。

同報告書では「爪状圧痕」の項をもうけている。そこでは圧痕を①有台の坏、皿の底部外面、高台の内側にみられるものであるが、一部長頸壺の底部にもある。②すべてのものにあるわけではなく一部のみにみられる。③断続的に1周するもの、1つ1つが連続的に1周するものなどがあるが、高台に沿って1周するのではなく渦巻き状になっている。④詳しくみると、弓状に外側に沿っているものもあるが直線的なものもあり、しかも圧迫痕ではなく横に動いた痕跡がみられた。これは爪の圧迫痕ではなく、何らかの工具が横方向に動いた跡ではないかとも思われると観察している。

そして、「高台の口径や傾き、高さなど検討したがはっきりした傾向はみられず、どういう条件のもとに付くかは不明である」と記述している。

このほか、愛知県名古屋市N288号窯（荒池1号窯）から、回転へう削りされた底部に爪形圧痕をもつ坏Bが1点出土している⁽⁷⁾。窯跡の時期は8世紀前葉と考えられている。兵庫県戸井町坪1号窯（9世紀前半）からも爪形圧痕をもつ坏Bが1点出土している⁽⁸⁾。

3. 爪形圧痕はどのような過程でつくのか

爪形圧痕がどのような過程でついたのか検討したい。まず、これまでの研究からわかったことをまとめてみると以下のようなだろうか。

ア、8世紀前半までさかのぼり、11世紀前半まで確認できること。

イ、兵庫県・愛知県・岐阜県・福井県・長野県（家岸窯）で確認されていること⁽⁹⁾。

ウ、高台のつく器種から確認されること。

エ、圧痕にはいくつかのタイプがみられること（正家1号窯側に詳しい）。

オ、圧痕はロクロ回転と同じ方向に連続するらしいこと（老洞古窯跡群）。

カ、高台を貼付と関係してついたと考えられているが（どういう条件でつくかは不明）、最後の調整段階でつ

いたとの考えもあること（老洞古窯跡群）。

キ、「爪形圧痕」は「爪先」でつけられたとする一方、「なんらかの工具」によってつけられたという考えもあること（正家1号窯）。

さて、以上をふまえて家岸遺跡の圧痕を観察してみよう。まず、器種は先にふれたように高台のつく坯に限られる。また圧痕は第11～13図にみるように、これまでに指摘されたのと同様な「爪形圧痕」であることがわかる。さらに、①中心部付近と高台に沿って（二重に）連続するものが多い（高台部に添うものは、高台を取り付けた後の調整ナデによって不明瞭になっているものが多く観察に注意を要する）。②中心に近い圧痕は間隔が狭く連続するようになる（高台に添うものは間隔があく）。③圧痕の弧は例外なく外を向く。④圧痕は底部を逆にして上から見た場合右回りに連続（ロクロは左回転）することがわかる。

この圧痕がいつどのようにしてついたかが問題になる。

底部に高台を取り付けるときは、作業に耐え得るまでに乾いた坯を裏返して底部周辺部を削り（いくぶんやわらかな器面がでて高台を付着しやすくなるだろう）、紐状にした高台部を底部に付着させることになる（乾燥の度合いの異なるものを付着させるのであるから、「どべ」とよぶ泥を坯の底部につけることがあったかもしれない）。

それから、親指と人差し指で（親指を外側、人差し指を内側に）紐を押さえつけるようにしながら、付着させていく⁽¹⁰⁾。このとき、爪が長かったり、強く押しつけると人差し指の爪が高台沿いに連続していくことになる。この作業は2本の指で続けるとすると自身が坯のまわりをまわるようになってしまう。そこで、中指を坯の中央近くに置き（バランスを取るにも役立つ）、（自分の位置は変えずに）高台を押しつけた後、指で高台をはさんだまま坯を右に少しずらす。次に中指を少し左に移動する。親指と人差し指もそれにつれて左に移動させながら高台をはさんで底部に付着させていく。という動作を繰り返すことになる。このようにして全体に紐を付着させると、中心付近に右回りの中指の爪形がつき、高台部に沿って人差し指の爪形が右回りにつくという結果になる。なお、高台付近の爪形は高台部の調整ナデによって消えてしまったり、不明瞭になってしまうことが多い。

以上は陶芸家の朝比奈克文氏と検討し確認した例である。すべての「爪形圧痕」が同様にしてついたのか他の例を実際に見ていないので判断できないが、少なくとも家岸窯の事例はこれで解決できたのではないかと考えている。

4.まとめ

「爪形圧痕」から何がわかるかという点を考えてみよう。1つは、須恵器の大量生産にともなって、裏の整形（みばえ）はしだいに重視されなくなってきたことが確かめられるだろう。また（爪形圧痕が何人によってつけられたのかという点が問題として残るが）、爪形圧痕のつく割合から何人の者が製作に従事したか検討できるのではなかろうか。あるいは、器種ごとに爪形圧痕の割合が大きく異なる事例のあることから、特定の製作者がときには特定の器種を分担することがあったのではないかとといったことも考えられるようになってくるのではないか。

爪形圧痕は注意してみると案外多く確認できるものかもしれない。しかし、すぐ近くの上の山古窯からは1点も確認できなかったように、どこにもあるというものではない。その点『西ノ池古窯址群』で指摘されたように「メルクマール」としての利用は可能ともいえる（小柳義男）。

註・参考文献

- 1 藤井祐介・高島信之・丹治康明ほか 1979 「西ノ池1号窯・2号窯発掘調査報告」『西ノ池古窯址群調査報告書』P39ほか 西ノ池古窯址群調査団
なお、同書は高島信之氏のご好意により入手できた。記して感謝したい。
- 2 荻野繁春 1981 「坏身・蓋製作上の2・3の問題点について」『老洞古窯跡群発掘調査報告書』P47-50 岐阜市教委
- 3 老洞古窯ではロクロの回転方向が、坏身類が左回転、大型器種では右回転を示している。坏身類の爪形圧痕もロクロの回転方向と同じ方向に連続する。
- 4 斉藤孝正 1983 「灰釉陶器」『正家1号窯発掘調査報告書』P19ほか 恵那市教委
- 5 若尾正成 1984 「北丘26号窯出土遺物」『北丘25号窯・26号窯発掘調査報告書』P25ほか 多治見市教委
- 6 本多達哉 1995 「爪状圧痕」『船場窯跡』P51・52 福井県教育庁埋蔵文化財センター
- 7 尾野善裕 1994 「NN288号窯出土遺物」『名古屋市天白区・緑区鳴海地区須恵器窯跡調査報告書』P31 名古屋市教育委員会
- 8 渡辺 昇 1990 『戸井町坪1号窯』P66 兵庫県文化財調査報告 第74号
脱稿後、中野市清水山一号窯跡灰原出土品（第172図77）及び二号窯出土品（第159図59）にも高台の内側に爪形圧痕がある坏のあることを確認した。
長野県教育委員会ほか 1997 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13』
なお、また屋代遺跡群S B2017の住居址から出土した黒色土器の高台の内側（第138図17）に爪形圧痕を確認した。
爪形圧痕が須恵器や灰釉陶器にのみみられるものでないことが明らかになるとともに、製作技術が類似していたことがわかる。
長野県教育委員会ほか 1998 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書3』
同資料については、県立歴史館柳原袈裟利氏のご教示による。
- 9 このほか老洞古窯跡の報告には「京都府下の古窯跡群においても確認されているようである」と記されている。
- 10 牟礼村古町の陶芸家朝比奈克文氏のご教示によれば、こうした作業は右利きの人なら左手ですることが多いようである。

出土土器観察表

蓋

図版No	口径	器高	残存率	色	備考
10	11.0	3.5	3/4欠損	こげ茶	ていねい
11	13.1	3.1	欠損ナシ	こげ茶	ベルト長軸2層より上の土器 器面ブツブツ
12	14.2	3.0	欠損ナシ	内面 こげ茶 外面 暗 橙	窯体内 ゆがんでいる
13	14.4	2.8	わずか欠損	明橙、暗橙	窯体内 ていねい
14	15.9	3.7	口縁部1/2欠損	内面 こげ茶 外面 明 橙	
15	16.1	3.7	1/2欠損	灰 色	窯体内
16	16.1	3.5	1/3欠損	内面 こげ茶 外面 暗 橙	ゆがみあり
17	16.2	3.5	わずか欠損	内面と端部こげ茶 明 橙	窯体内 ていねい
18	16.6	3.3	1/3欠損	明 橙	窯体内 埋土中 ゆがみあり 亀裂あり
19	16.7	3.6	1/2欠損	灰黒色	
75	16.8	2.9	1/3欠損	灰 色	S K 1 内面溶滓付着

(埋土中とは攪乱層の土をいう)

杯(1)

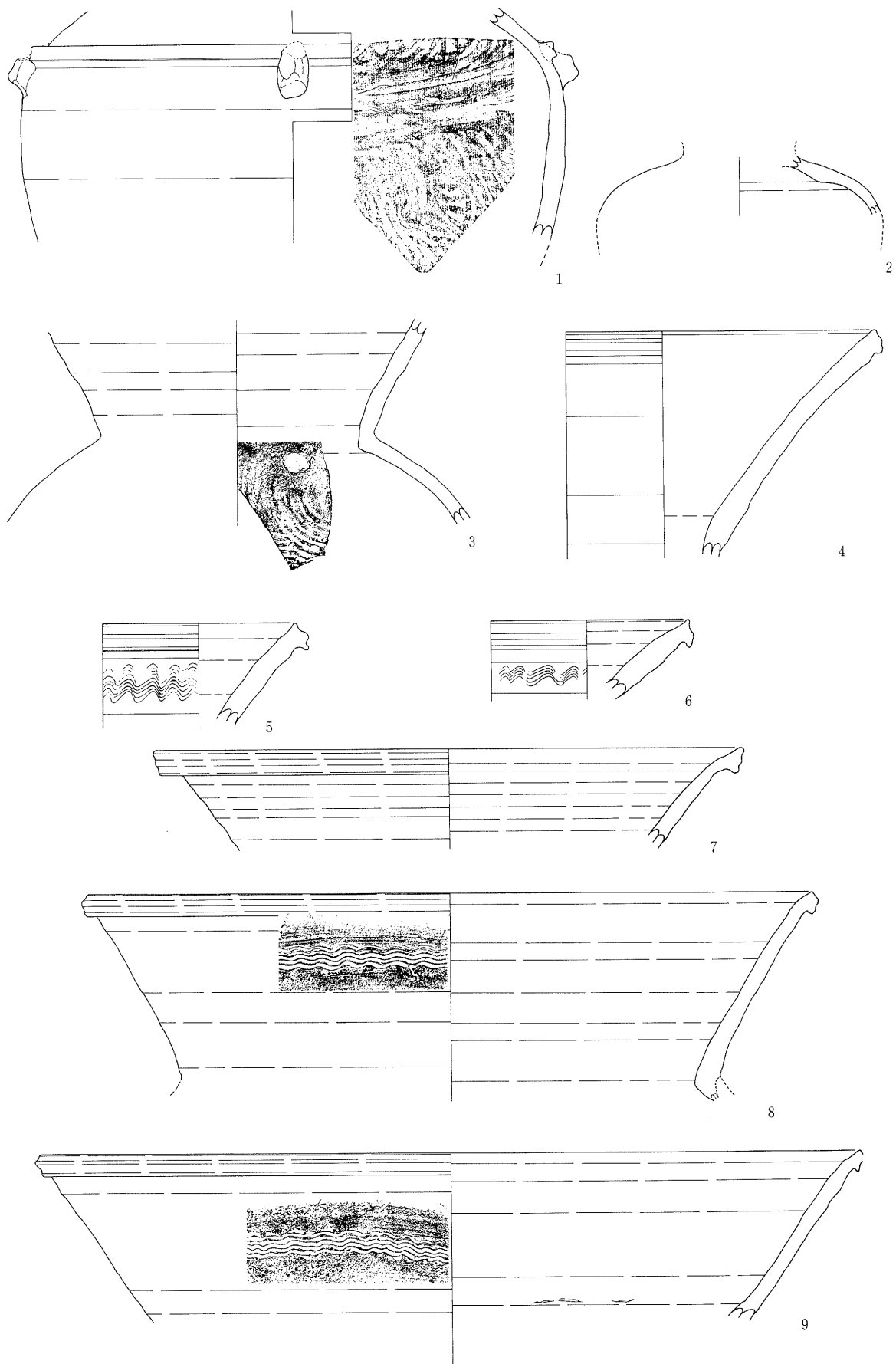
図版No	口径	底径	器高	残存率	色	備考
20	12.1	5.8	3.3	1/2	暗褐色	窯体内
21	12.3	6.0	3.8	7/8	暗褐色 (こげ茶)	欠損部分口縁部 窯体内
22	12.0	6.0	3.5	3/4	明橙、こげ茶	窯体内
23	12.6	6.3	3.6	3/4	こげ茶	窯体内
24	12.4	6.5	3.7	欠損ナシ	こげ茶	窯体内
25	12.5	6.2	4.1	1/2	こげ茶	窯体内
26	13.0	6.2	4.0	欠損少々	こげ茶	窯体内
27	12.8	6.7	4.1	4/5	こげ茶	窯体内
28	12.9	5.9	4.0	ほぼ完形	こげ茶、底部明茶	窯体内
29	12.7	5.6	3.7	完 形	こげ茶	窯体内
30	12.1	6.2	3.3	欠損部わずか	こげ茶	窯体内
31	12.4	6.1	4.2	口縁部1/6欠損	明橙、こげ茶	窯体内床近く
32	12.9	5.5	3.9	2/3	明橙、灰色 (部分的に口縁)	窯体内床近く ベルト長軸の2層より下の土器
33	13.0	6.4	3.8	3/4	明 橙	試掘 窯体部
34	12.6	6.2	3.1	欠損ナシ	暗 橙	試掘 天井部直上 窯体内
35	12.8	6.2	4.0	完 形	1/2ずつ明・暗橙	窯体内
36	12.9	6.3	3.7	3/4	灰 色	床面
37	13.0	6.1	4.3	1/4	灰 色	床面
38	12.4	6.2	3.9	2/3	内面 明・白・橙 外面 明・白・橙 とこげ茶	試掘 天井部直上
39	17.3	6.4	3.8	ほぼ完形	内面 明・白・橙 外面 明・白・橙	口縁部少々欠損 ベルト長軸2層より上の土器
40	12.2	6.2	3.7	欠損ナシ	こげ茶	検出面 窯体近く
41	12.9	7.0	4.2	2/3	こげ茶	
42	13.4	5.0	3.5	2/3	明 橙	試掘
43	12.7	5.6	4.1	2/3	明 橙	試掘 埋土中

杯(2)

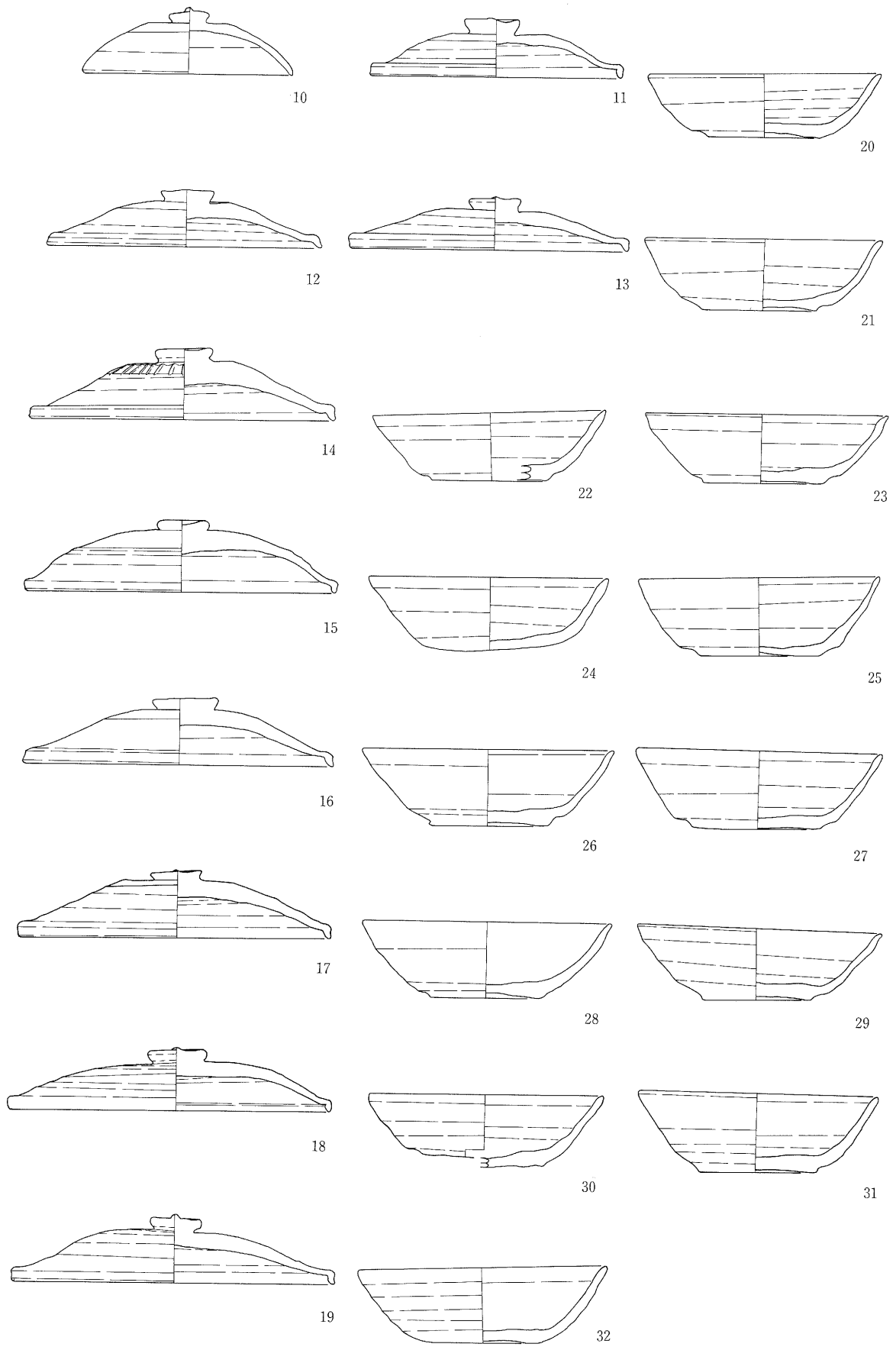
図版No.	口径	底径	器高	残存率	色	備考
44	12.6	5.6	3.7		明橙、こげ茶	試掘
45	12.8	6.9	3.7	3/4	明橙	試掘
46	11.7	5.6	4.4	1/2弱	明橙、こげ茶	試掘
47	11.4	6.1	4.1	口縁部11/12欠損	こげ茶	試掘
48	12.5	5.6	3.7	1/2	明橙	埋土中
49	11.9	6.0	4.0	口縁部3/4欠損	内面 灰色と暗橙 外面 こげ茶	
50	13.3	6.1	3.8	1/4	灰色、黄白色	P i t
51	12.6	5.8	4.1	完形	明こげ茶	
52	13.9	6.1	3.6	口縁部3/4欠損	内 こげ茶 外 灰色、こげ茶	窯体内
53	13.2	4.9	3.5	体部2/3欠損	こげ茶	窯体内
54	12.7	6.8	3.6	1/3	灰色と明茶	窯体内
55	12.6	6.1	4.0	1/4	明橙 口縁部灰色	埋土中 床面
56	12.4	6.4	4.0	底部1/2 口縁1/4	明橙	試掘
78	13.4	6.7	3.8		灰色	S K 1
79	13.6	6.7	3.8	2/3	明橙	S K 1 S K 1

高台付杯

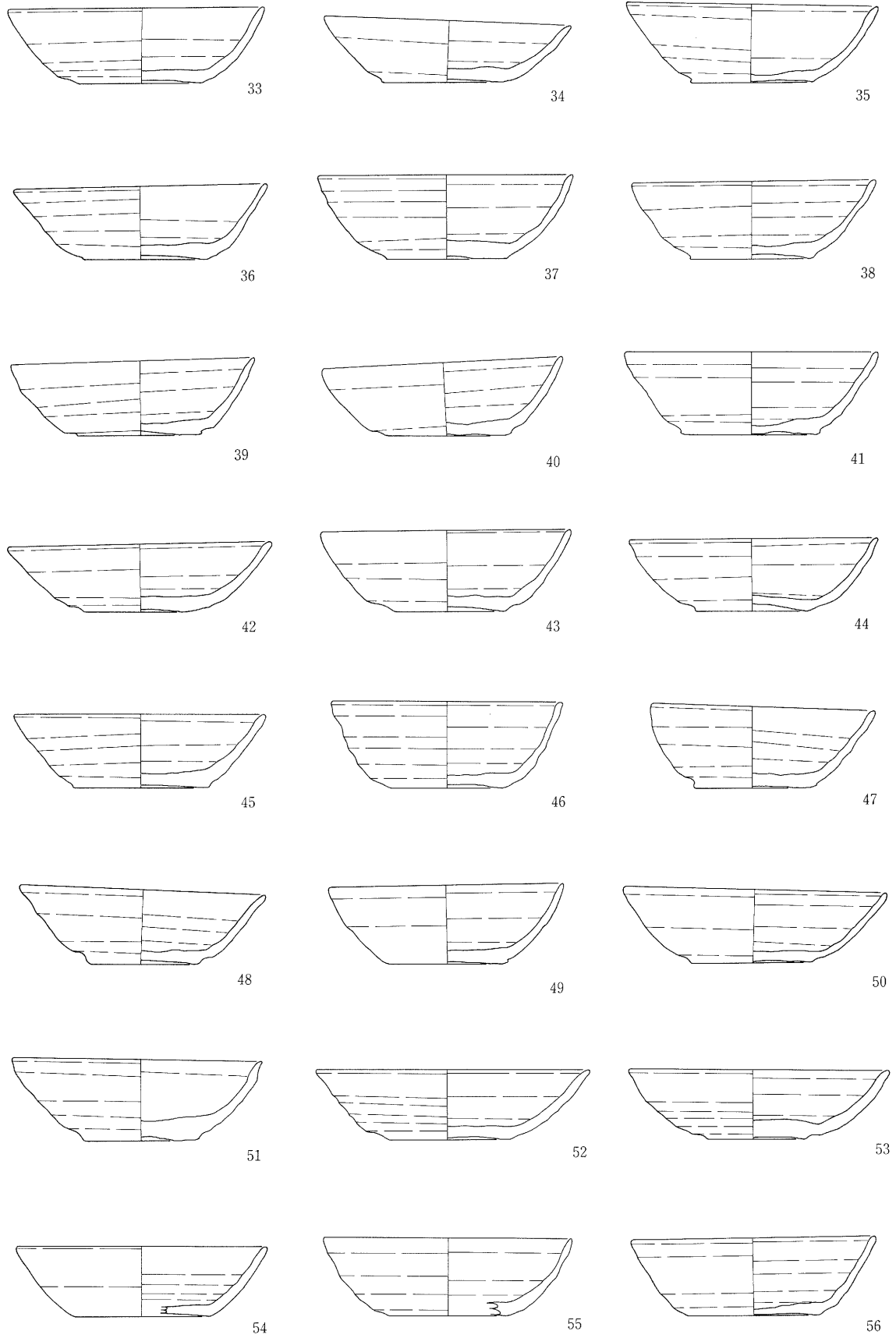
図版No.	口径	底径	器高	残存率	色	備考
57	9.5	6.3	4.2	わずか欠損	こげ茶	窯体内 底部にツメあと、ブクブクあり
58	10.0	6.0	4.4	2/3欠損	灰色	底部にツメあとあり 窯体内 ていねい 糸切→回転ナデ
59	10.1	7.0	4.8	1/6欠損	明こげ茶	窯体内 底部にツメあと、ブクブクあり
60	10.6			口縁のみ1/2弱	灰黒色	黒色土中 ていねい
61	14.2	9.0	6.7	体部2/3欠損 底部1/2欠損	こげ茶+黒	窯体内 黄白色の灰がついている
62	14.8	8.8	7.0	1/3欠損	黒褐色 明こげ茶	窯体内床近く ゆがみあり
63	14.5	9.5	3.8	1/2欠損	明橙	ゆがみあり 底部にツメあとあり
64	14.4	9.8	3.9	口縁部わずか欠損	底部、内面 明橙 外面 こげ茶	窯体内
65	14.6	10.7	3.4	1/3欠損	灰黒色	ブクブクあり 窯体内 糸切→回転ナデ?ケズリ?
66	14.9	10.8	3.8	1/4	灰色	ていねい
67	14.7	10.1	4.0	1/2欠損	明橙	ベルト長軸2層より上の土器 底部にツメ あとあり
68	15.4	11.0	4.3	1/2欠損	明橙	窯体内 口縁部ゆがみ大きい
69	9.0	9.3	4.1	3/4欠損	灰色	
70	15.5	11.2	4.0	1/2欠損	灰黒色	底部にツメあとあり
71	16.1	10.5	4.2	わずか欠損	明こげ茶	ゆがみ大きい 底部にツメあとあり
72	15.8	10.3	3.9	2/3欠損	明橙	底部にツメあとあり
73	15.6	10.4	4.0	1/2欠損	明橙	ひずみあり 底部にツメあとあり
74	16.1	10.4	3.7	1/3欠損	明橙	窯体内 ゆがんでいる
75						
76	14.5	9.6	7.6	1/3欠損	灰色	S K 1 底部にツメあとあり



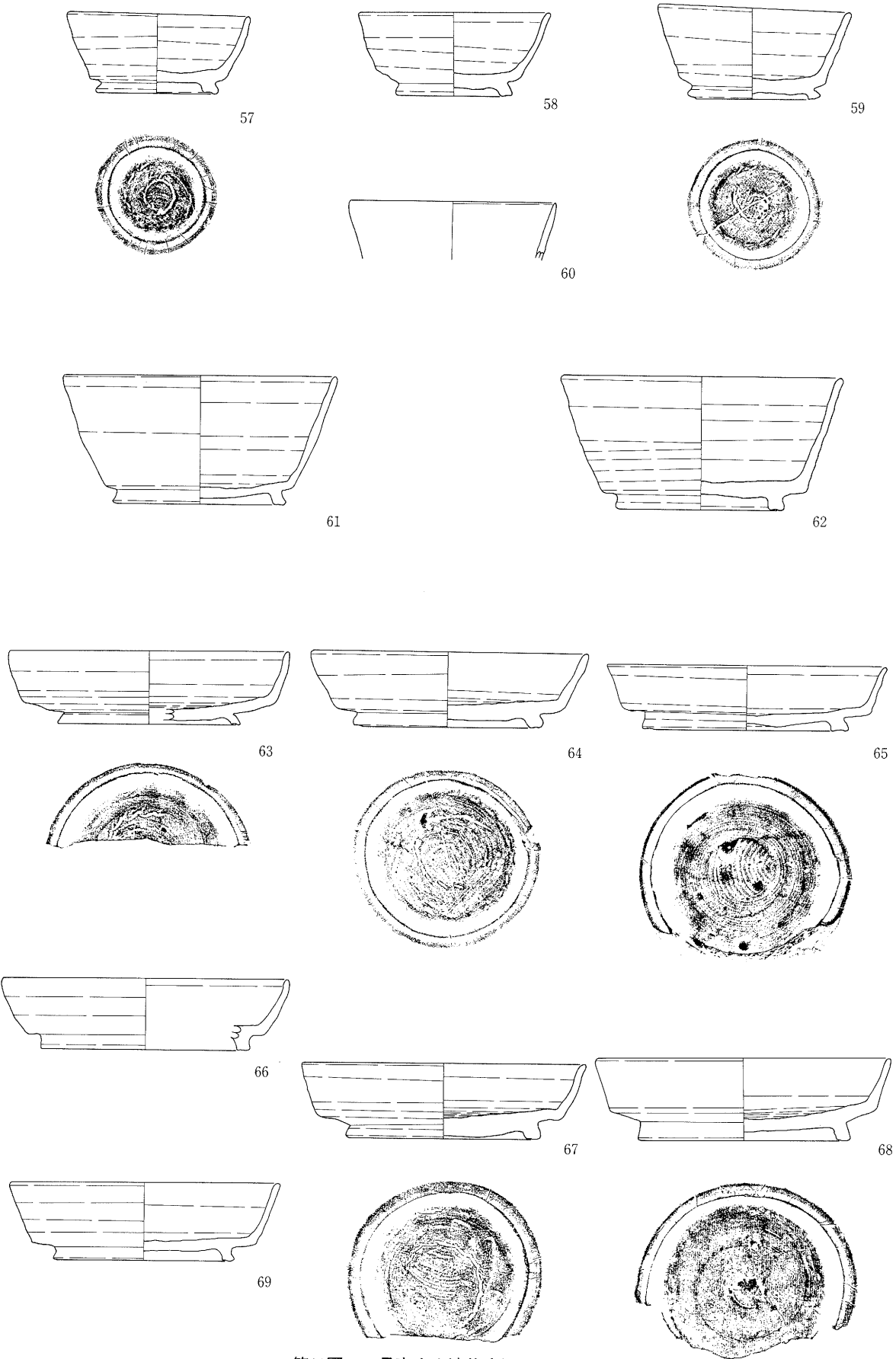
第8图 1号窟出土遗物实测图 (1~6 1:3、7~9 1:4)



第9图 1号窟出土遗物实测图(1:3)



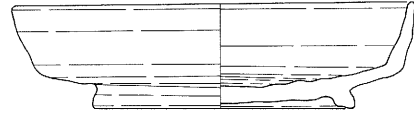
第10图 1号窟出土遗物实测图(1:3)



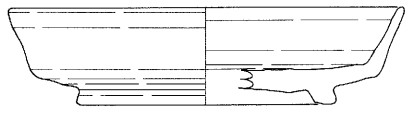
第11图 1号窟出土遗物实测图 (1:3)



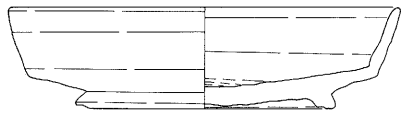
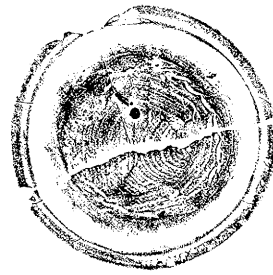
70



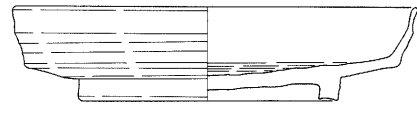
71



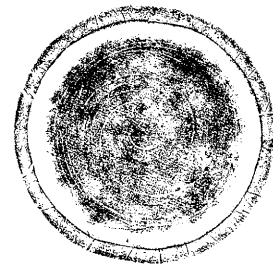
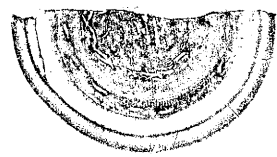
72



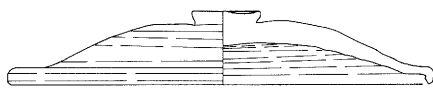
73



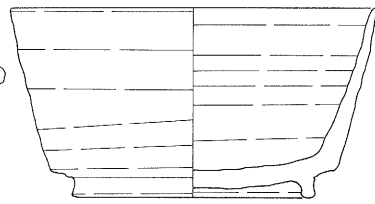
74



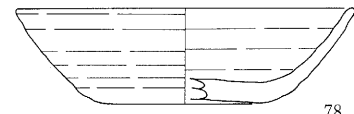
第12图 1号窯出土遺物実測図(1:3)



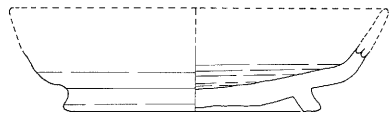
75



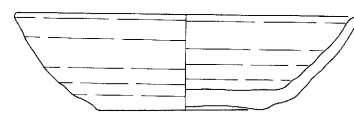
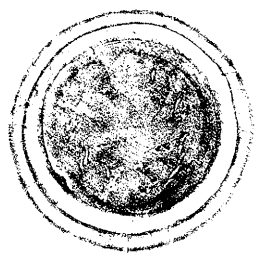
76



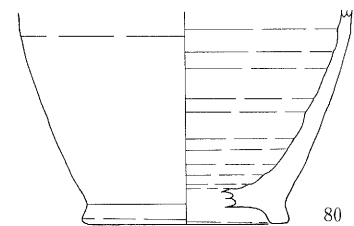
78



77

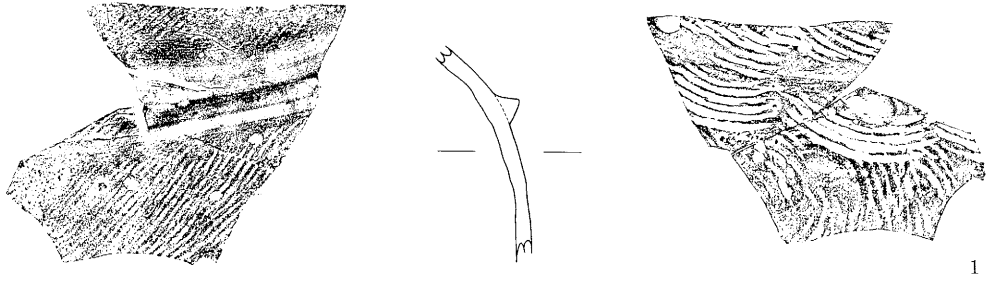


79

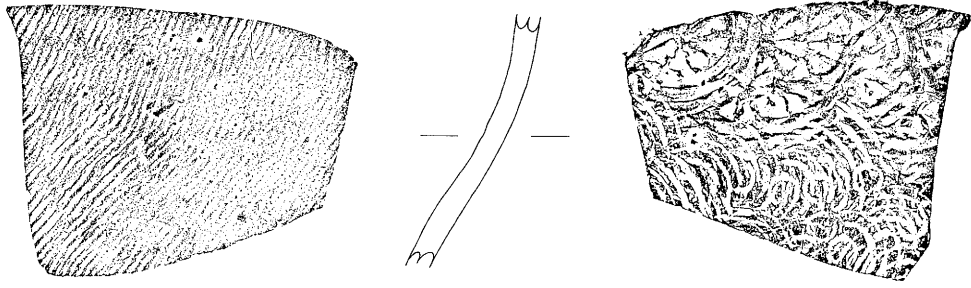


80

第13图 SK 1 出土遺物実測図(1:3)



1

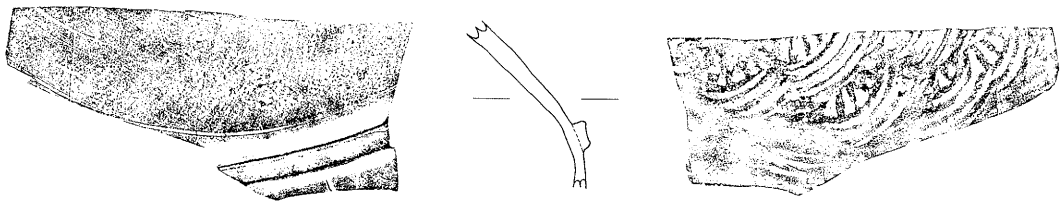


2

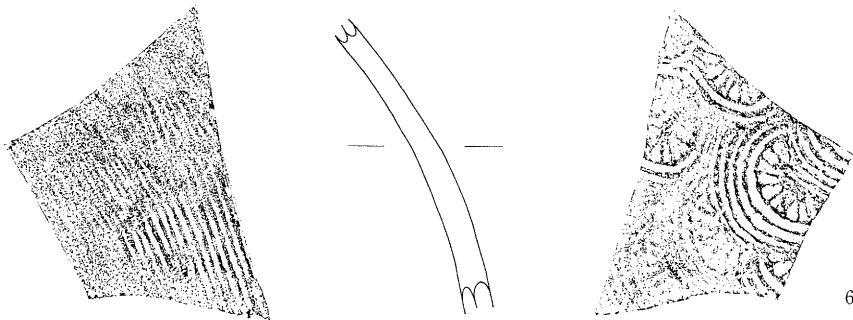


3

4

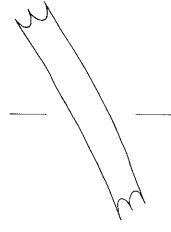
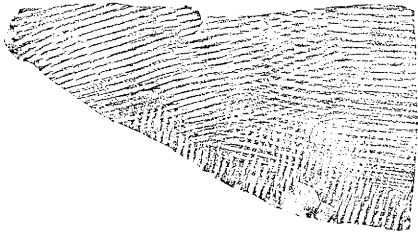


5

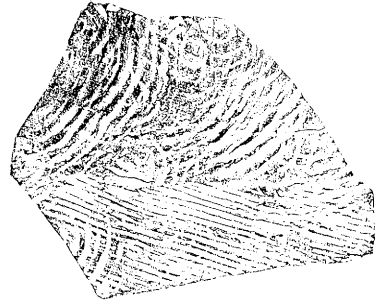
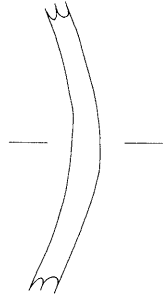
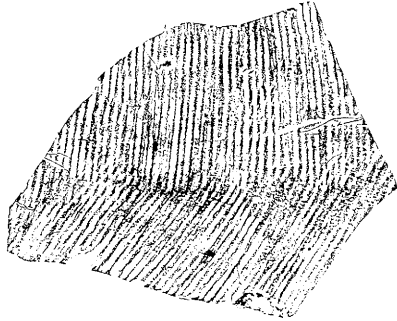


6

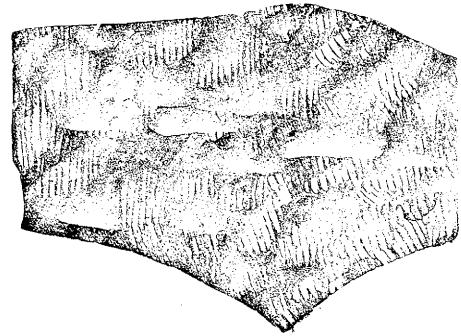
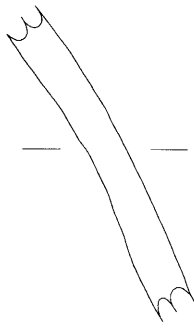
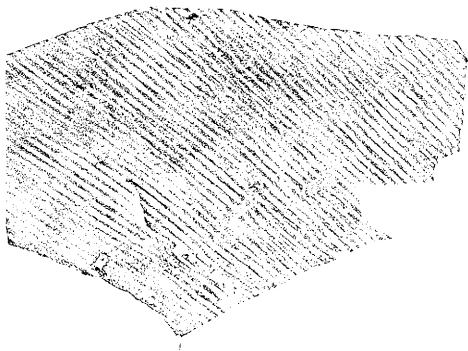
第14図 タタキ目と当て具痕拓影図 (1 : 3)



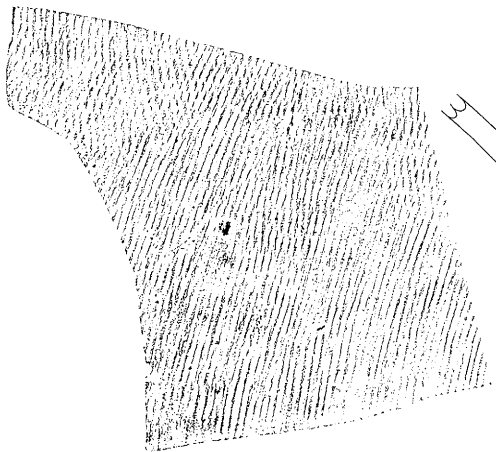
7



8



9



10

第15図 タタキ目と当て具痕拓影図 (1 : 3)

写真図版

北西より遠景



北側より遠景



南西より遠景



図版 2



調査風景



前庭部遺物出土状況

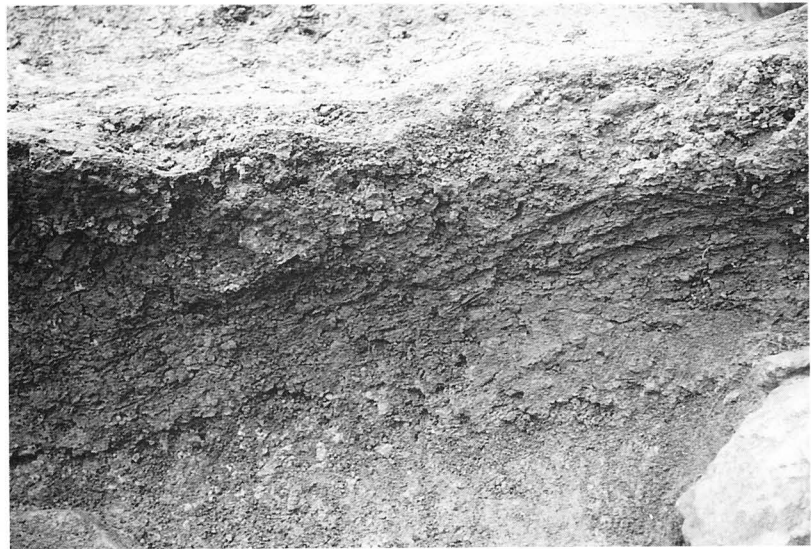


燃焼部断面

窯体内底部遺物出土状況



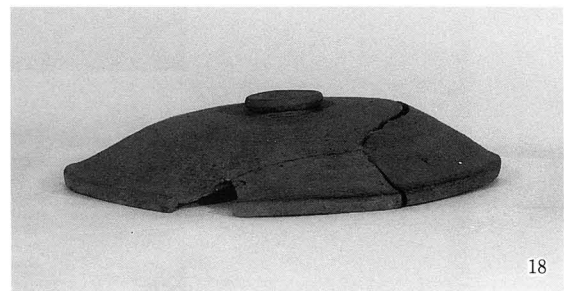
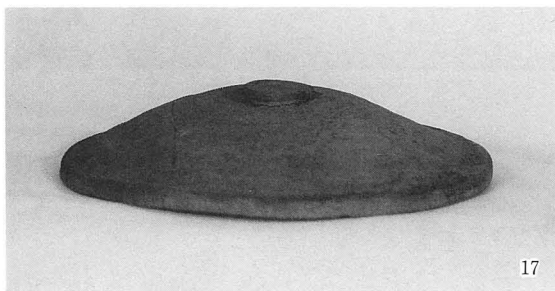
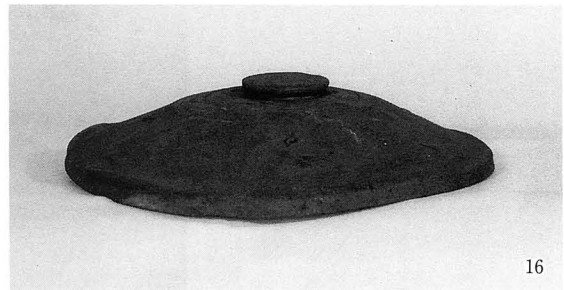
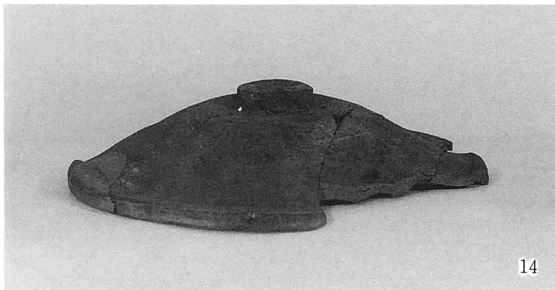
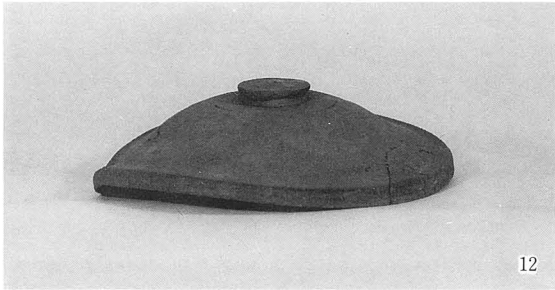
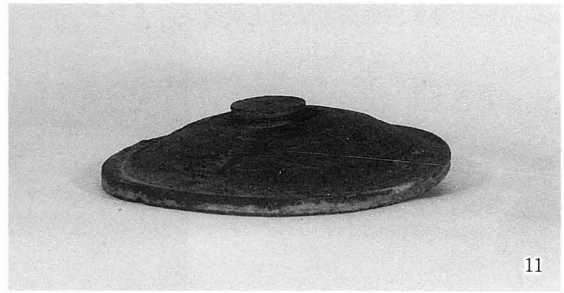
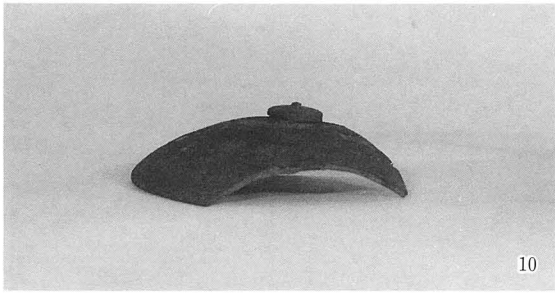
北側窯壁の指ナデ痕



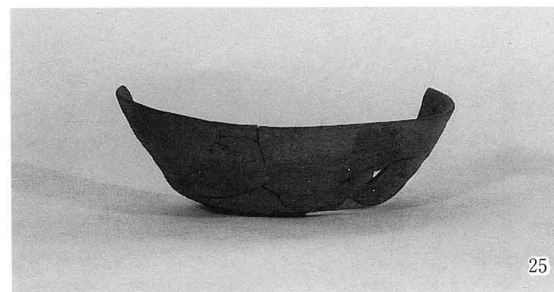
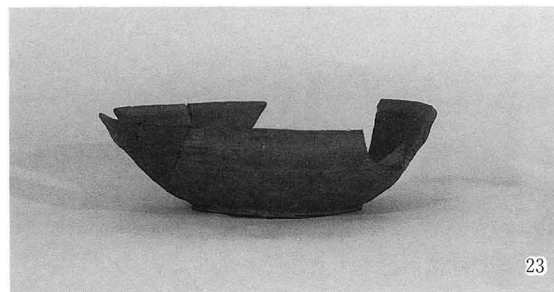
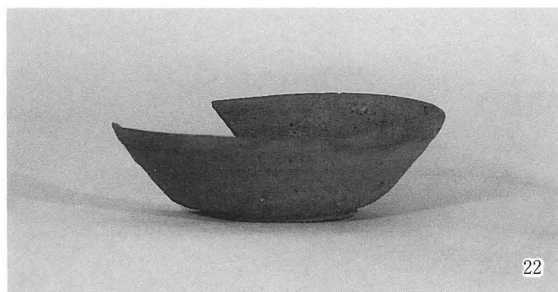
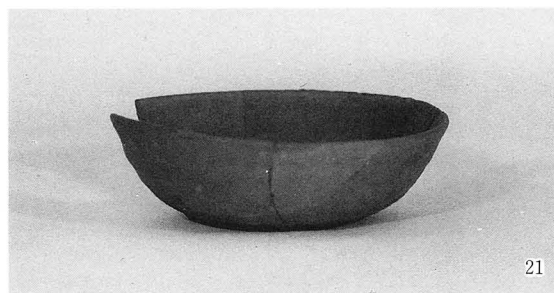
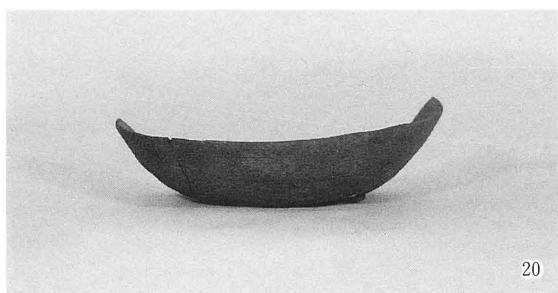
SK 1



图版 4

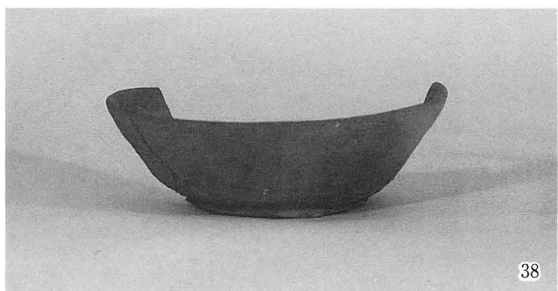
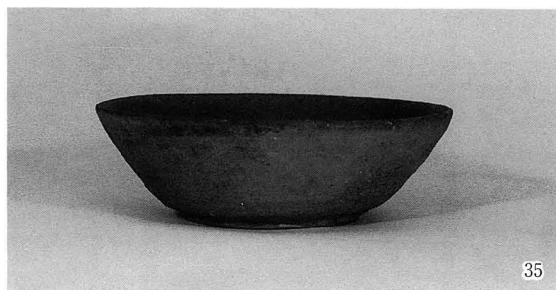
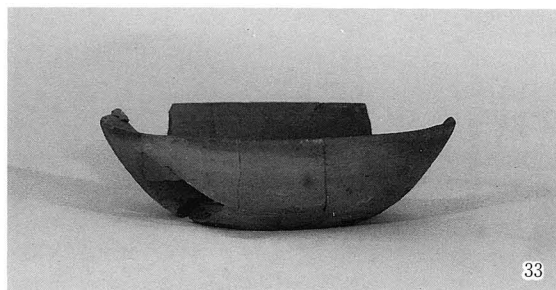
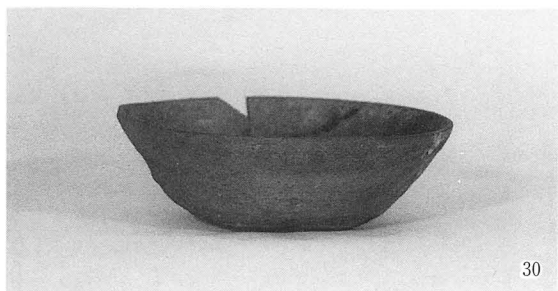


1号窯出土土器（蓋）

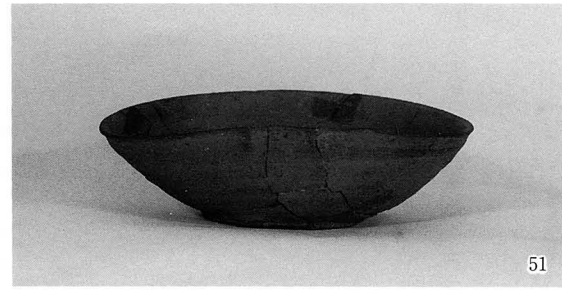
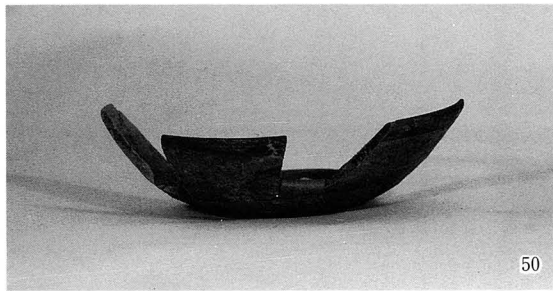
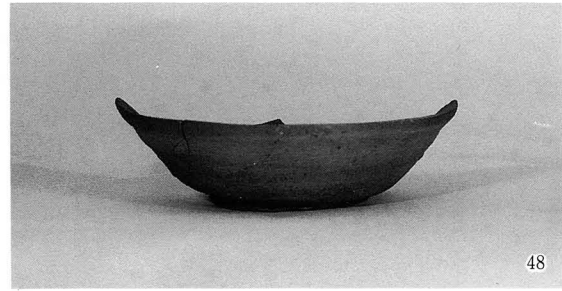
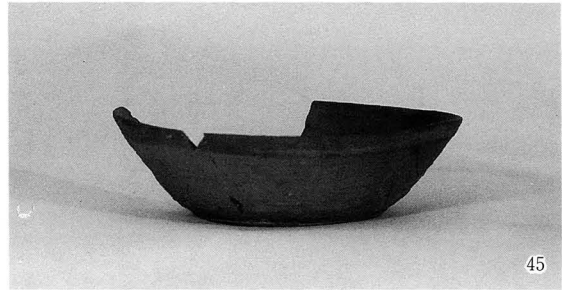
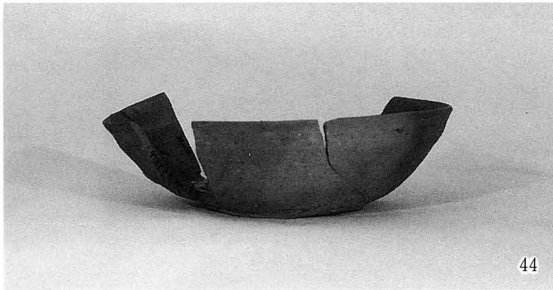
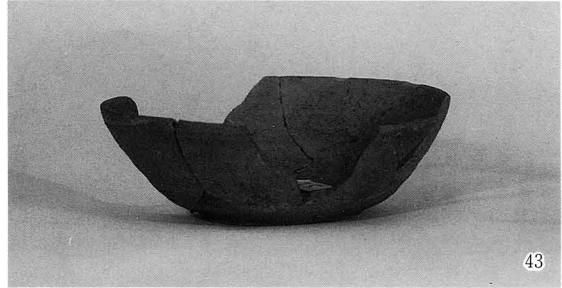
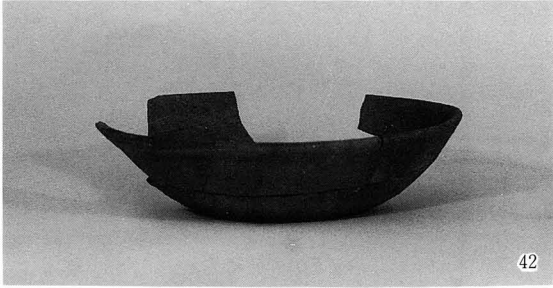
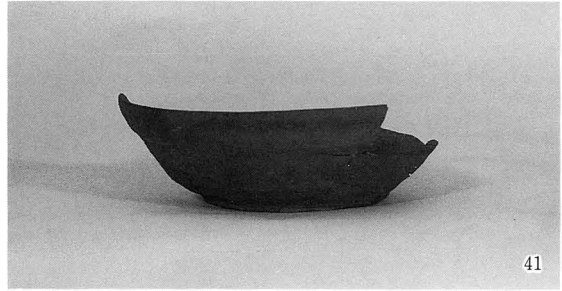


1号窯出土土器(坏)(1)

图版 6

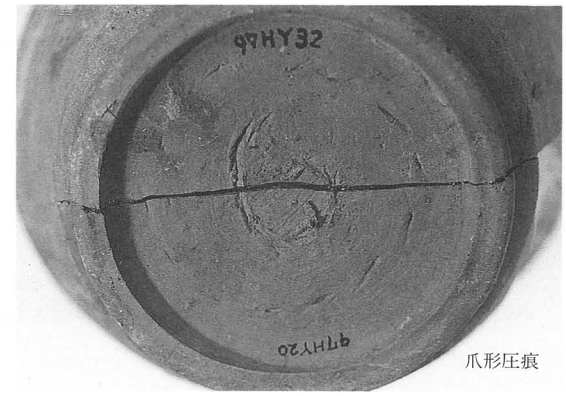


1号窯出土土器(坏)(2)

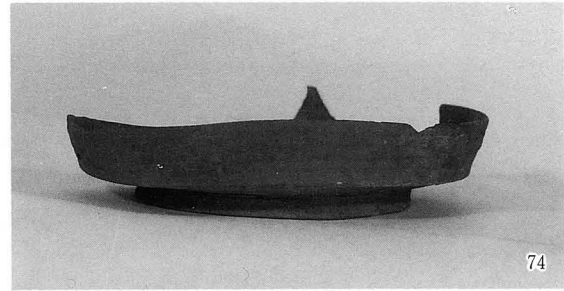
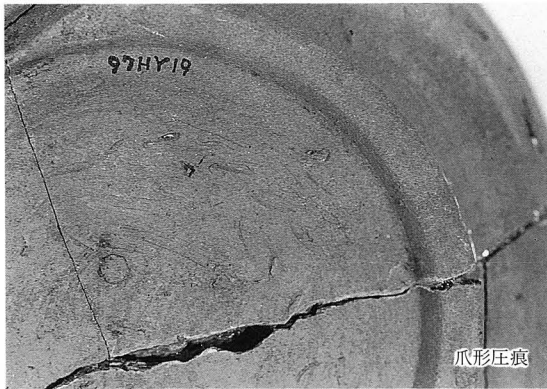
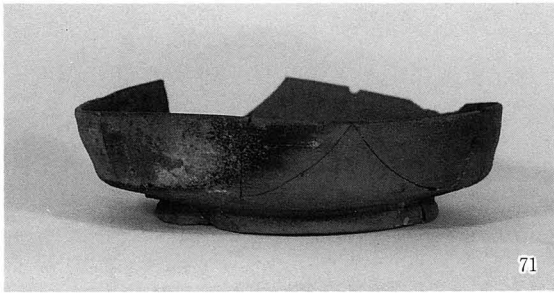


1号窰出土土器(坏)(3)

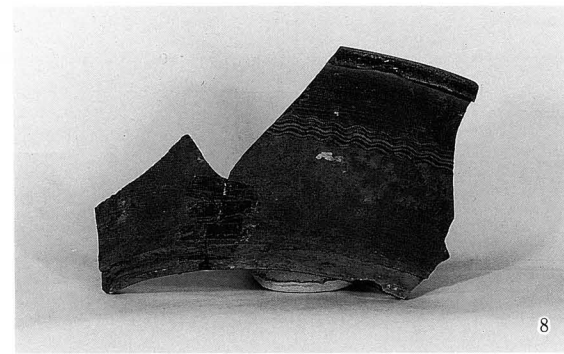
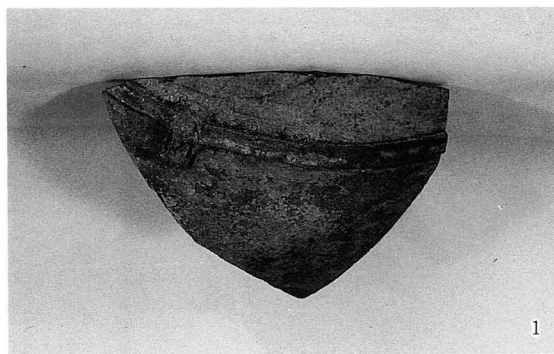
图版 8



1号窯出土土器（高台付坏）(1)

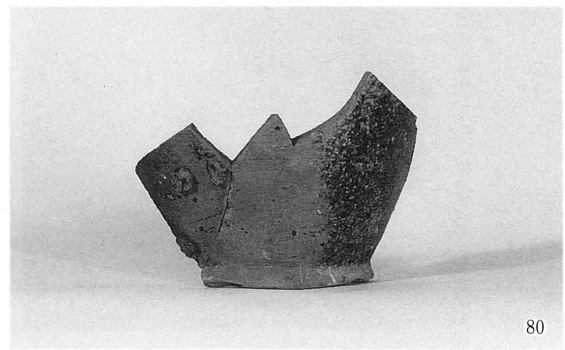
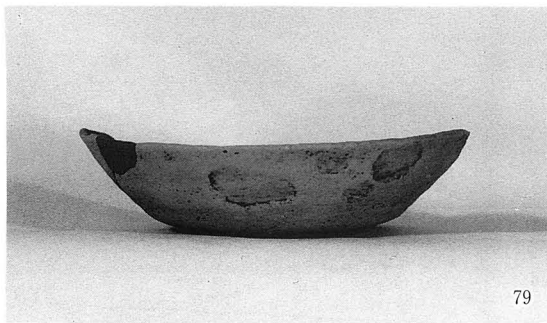
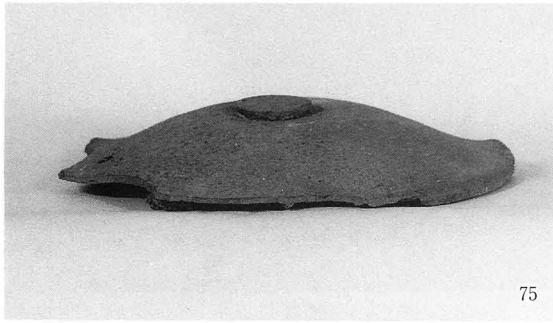


1号窯出土土器（高台付坏）（2）



1号窯出土土器

図版10



SK1 出土土器



癒着した土器

報告書抄録

ふりがな	やぎし いせき							
書名	家岸遺跡							
副書名	農村総合整備モデル事業農道65号線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —古窯址調査—							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	横山かよ子							
編集機関	牟礼村教育委員会							
所在地	〒389-1293 長野県上水内郡牟礼村大字牟礼2795-1 TEL (026) 253-2511							
発行年月日	1998年3月31日							
印刷製本	ほおずき書籍株式会社							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
やぎしいせき 家岸遺跡	ながの けんかみ のち 長野県上水内 ぐん む れ 村 大字 郡牟礼村大字 ひらいで 平出	205842		36° 43' 54"	138° 15' 14"	1997.6.25) 1997.7.18	200m ²	農道建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
やぎしいせき 家岸遺跡	古窯址	平安時代	窯址 1 土壙 1			須恵器		

家 岸 遺 跡

—— 農村総合整備モデル事業農道65号線建設
設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——
—— 古 窯 址 調 査 ——

発行日 平成10年3月31日
編集発行 牟礼村教育委員会
印刷 ほおずき書籍株式会社
〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5
